

第五十七回中央教化研究会議 パネルディスカッション

仏教から戦争と平和を考える

菅野 ただいまより、第五十七回中央教化研究会議のパネルディスカッションを始めさせていただきますと存じます。初めに、今回の中央教研で扱う「仏教から戦争と平和を考える」というテーマをもとに、三人のパネラーの先生方からパネル発表をいただきたいと思えます。

ではまず、パネラーの先生方をご紹介します。最初にご発表いただきますのは、国際政治学者の池上^{いけがみ}萬奈^{まな}先生でございます。池上先生は、慶応義塾大学をご卒業された後、同大学大学院を修了され、現在では立正大学の非常勤講師として活躍されておられます。本日は、「国際政治学の立場から、現在の国際紛争状況について」というタイトルで、最初のパネラーとしてご発表をいただきます。では、池上先生、よろしくお願い致します。

国際政治学の立場から現在の国際紛争状況について

池上 ご紹介にあずかりました、池上萬奈と申します。本日は、このような会議にお招きをいただき、大変光栄に存じております。今回の「仏教から戦争と平和を考える」というテーマに関しまして、国際政治学の立場からお話をさせていただきます。

そもそも国際政治学というのは、いかに戦争を回避させるかという趣旨で始まった学問です。第二次世界大戦途中、

ナチの迫害から逃れてアメリカに亡命してきたユダヤ人学者を中心に、戦後、アメリカで盛んになりました。戦争を回避するには、今までの戦争を色々と分析してみる。どういう原因で戦争が起きたのか。そして、どのような経緯を迎えて終結したのか。そういうことを色々と調べて、議論を打ち立てる。例えば、もっと経済的な交流が深まれば、戦争は起こりにくくなるのではないか。いや、それだけではなく、国際的な共通の規範が必要だ。また、昔ながらの、お互いに勢力が均衡していれば、その両者間では戦争が起こりにくいなど、そういった理論を基に、色々と平和を追求してきました。また、地域の特徴を知らなくてはいけないということで、中東の専門家、アメリカの専門家など、様々な地域の専門家、それから国際機関の専門家、安全保障の専門家など、様々な専門分野に分かれております。時には、有識者会議に招かれ、外務省や政治家に進言することも行っております。

国連難民高等弁務官でご活躍されました、緒方貞子おがたまこと先生も、国際政治学者の一人です。私がちょうど博士論文を書いていたときに、お目にかかった際、先生ご自身の体験談で、「もう何度も何度も博士論文を跳ね返されて、「もう嫌だな」、「これで大丈夫だ」と思ったのだけれども、それも突き返されてしまって、もう泣く泣く、六か月間も部屋に閉じこもって、博士論文書いたのよ。あなたも頑張りなさい」みたいな感じで励まして下さいました。

そもそも私は、三人の子育てが一段落したところで、この子育てに使っていたエネルギーを何に使おうと思いついて、「あっ、そっだ。今度は真面目に勉強しよう」と思って大学院に入りました。というのも、学生時代に社交ダンスをスポーツ化した競技ダンスというもので、全日本、東日本とか、色々ある試合に出て、練習、試合、練習と、学問とは少し遠い生活をしておりました。そのときのパートナーと結婚することになったのですが、それはさておきまして、私、大学院では一生懸命勉強致しました。そのときの同僚は、子供たちと同年代で、その何人かはウクライナの問題で、よくテレビに出て解説しています。彼らの活躍を見て、母親の心境で喜んでる次第です。

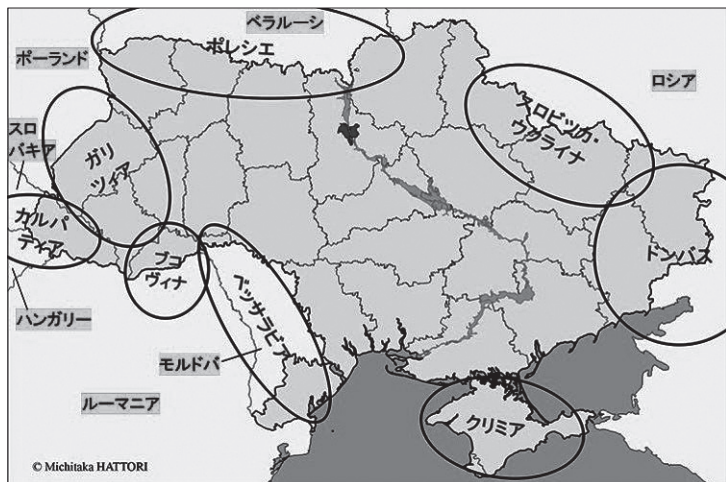
さて、本日は、少し問題提起をさせていただきます。国際政治学は、いかに戦争を回避するかを目的として始まっ

た学問領域です。戦後の我々は、戦争はよくないこととして、平和に絶対的に高い価値を置いてきました。日本では、「絶対に戦争をしてはならない」という考えは、幅広く浸透していると思います。しかし、「戦争を仕掛けられたらどうするのか?」という議論は、なかなか議題に上りません。

ウクライナの事例を取ってみれば、理不尽な侵略から領土、国民を守ろうと戦っている側に、戦い、自衛戦争を止めろと言えますか。自衛戦争というのは、侵略戦争と違って国際法違反ではありません。しかし、お互いに、人と人が殺し合っているのだから、両者に止めろということは言えるかもしれませんが。では、和平交渉の結果、小さな国に対して、「あなたたちはこれで我慢しなさい」と言って、小国の犠牲によって成り立つ平和をどう思いますか。これらの問いかけを頭に入れていただきながら、話を進めていきたいと思えます。

よく、戦うことはよくないとして、マハトマ・ガンジーの非暴力主義が取り上げられます。ガンジーの非暴力主義というのはどのようなものなのでしょうか。ガンジーは、植民地として英国に利益を吸い取られ、貧しい生活を強いられているインド人を扇動し、武力では立ち向かうことのできない英国に対して、非暴力・不服従を貫いて、それによってインドを独立に導いた方です。海岸沿いの住民が、塩を作って利益を得ることも許されない。塩の売上は英国の利益となる。これにおかしいと思っても反抗することができない。そのような状況から脱するために、ガンジーの主導の下、多くのインド人が命を懸けて塩の道を行進し、多くの民衆が立ち上がって、独立を目指す運動に繋がりました。その行進中には、頭蓋骨を割られて倒れる仲間もいました。しかし、それでも暴力を恐れず、どんどん、どんどん行進して、自らの犠牲を伴うことを恐れない態度が必要だったわけです。ですから、非暴力主義というのは、自分たちの痛みがないわけではなくて、自分たちが犠牲にもなるかもしれないという覚悟を承知した上で、行わなければならぬものでした。

現代では、揉め事は話し合いで決着をしようというのが、平和的解決だと思えます。そのために国際連合があり、



国際仲裁裁判所や、外交努力がある。しかし、なぜそれがうまく機能しないのか。強い国のやりたい放題なのか。そうならないための方策はないのか。そのような国際社会の理不尽な構造のお話の前に、まずは、ウクライナ関連と、イスラエル・パレスチナに関連する国際政治の立場からの説明を少しさせていただきます。テレビでは言わないようなことも話すかと思えます。

ウクライナ

二〇二二年二月二十四日、約二年半前ですね。ウクライナの首都キーウへのミサイル攻撃が始まり、ロシアが国境線を越えてウクライナへの侵略を開始しました。ウクライナ東部にドンバスという地域があり、そこに住むロシア系住民が迫害を受けている。それを助けるために侵攻する、特別軍事作戦であるという名目での侵攻でした。それは、まさにヒトラーがチェコスロバキアのズデーテン地方ここに住むドイツ系住民が迫害されている。それを助けるためにドイツは侵攻すると言って、ズデーテン地方を侵略して、そこを占領してしまっただけです。それを思い出させるものでした。そのときにどうしたのか。列強国である英国のネヴィル・チェンバレン首相は、「はるか彼方の、我々が何も知らない人たちの対立だ」と言って、ドイツの侵略行為に目を背けて、その行為を認めてしまいました。英国が何も言わなかったことで、翌年、ドイツはポーランドに侵攻しました。それから、オランダ・ベルギーにも侵攻することになります。それでも、チェンバレンは戦争拡大を恐れて、ベルギーやオランダ

を犠牲にしても、ドイツとの和平によって戦争を終結させようとした。

このとき、もし英国とドイツが和平をしていたら、ヒトラー率いるナチス・ドイツがヨーロッパ大陸を統治して、恐ろしい人権侵害に基づいた平和があつたかもしれないとされています。戦争のない状態を平和と定義するならば、そこで戦争は終結してしまうわけです。それに待ったをかけたのが、ウィンストン・チャーチルです。チェンバレンによる一連の宥和政策を非難して、チャーチル首相が登場することになります。チェンバレンの宥和行為は、ヒトラーに自信を与え、ドイツが他国を侵略しても英国は実力行使に出てこない。侵攻を拡大できるといった、誤ったメッセージをヒトラーに送つたものだとしました。現代でも、チェンバレンの宥和政策は非難されています。

国際政治の立場から、ロシアによるウクライナ侵攻、これを認めれば第二次世界大戦後において、欧州で軍事侵攻による国境線の変更を認めることになる。戦後八十年にわたって守られてきた、主権と領土の尊重という規範が崩れてしまう。また、一九三八年九月のミュンヘン会談で、国際連盟常任理事国である英国が率先して連盟規約を反故にし、ドイツによる軍事的脅威に屈して、ドイツが侵略して奪った領土を認めたことは甚大であり、これを認めたことによって、第二次世界大戦の引き金となった。ウクライナの領土喪失は、戦後の欧州で守られてきた重要な規範の喪失になると、このように分析しています。ということで、欧州はウクライナに支援をしています。

しかし、どこかの時点で和平交渉をしないと、戦争は終わりません。和平交渉、外交交渉というものは、百パーセントどちらかの意向が通るものではなくて、割合は異なっていますが、両者がある程度、譲歩しなくてはならないわけです。「これは譲歩したけれど、これだけは守れたんだ」という部分を作らないと、国民に納得してもらえないのは難しい。現在の状況で言えば、今ここで停戦をすれば、そこがロシアとウクライナの国境線になってしまいます。和平交渉を進めるためには、まずロシアが、ウクライナ侵攻以前の国境線にまで撤退する必要があります。そして、ウクライナには、二〇一四年にロシアに奪われ、併合されたクリミア半島、ここを我慢して諦めてもらう。そういう条件で停戦

を進められないか、ということ、周りの国々で模索している状況です。しかし、ロシアを二年前の国境線まで戻させるというのが難しい状況のようです。今月二十六日に、前ウクライナ全権大使にお目にかかるので、情報をアップデートすることができませんが、現在、水面下ではこのような動きになっているようです。

次にパレスチナの問題について、これは複雑な問題です。約二千年前、西暦七〇年にローマ帝国からこの地を追われたユダヤ人と、その後、その地に住み着いたパレスチナ人との間の問題です。ユダヤ人虐殺などの悲しい歴史からいずれ、この地に我々の国を作りたいというユダヤ人の願いを聞き入れて、一九四七年に、国連でパレスチナ分割案が提案され、採択されました。それは、ユダヤ人にパレスチナの領土の五十七パーセントの土地を割り当てるという決議で、ユダヤ人側はそれを承諾しました。しかし、その当時、ユダヤ人の人口は三十一パーセント、所有する土地はわずか六パーセントでした。それなのに、なぜ五十七パーセントの土地をユダヤ人側に割り当ててるのか。その決議は不公平だとして、パレスチナ側はこの分割案を拒否いたします。

一九四八年にパレスチナ分割案によってイスラエルが建国されます。その後すぐに、周辺のアラブの国々の参戦で、第一次中東戦争が勃発しました。しかし、イスラエルが勝利して、その結果どうなったかという点、パレスチナの七十七パーセントの土地がイスラエルのものになった。それによって、七十万人から百万人と言われていますが、その土地を追われたパレスチナ人が難民となってしまった。

それから第二次、第三次、第四次と中東戦争が起こるのですが、やがて、一九九三年、オスロ合意というものができます。アメリカのクリントン大統領の仲介の下、イスラエルのイツハク・ラビン首相と、パレスチナ解放機構（PLO）のヤーセル・アラファト議長が相互承認し、調印いたします。これがどういう内容かというと、パレスチナの暫定自治を認める。ヨルダン川西岸とガザ地区から、イスラエルは段階的に軍を撤退させる。そういう合意でした。しかし、これに対して、双方の過激派が和平に反対しました。ついに、ラビン首相は暗殺されてしまいました。

国際社会は、平和的解決を目指して、一方的な肩入れを避けてきました。しかし、ここで少し宗教的な話になりませんが、アメリカ人の二十二パーセントから三十パーセントが信仰しているキリスト教福音派（エヴァンジェリカルズ）。彼らは聖書に書かれている、神がこの地をユダヤ人に与えたものとして、それを信じている。これが、アメリカがイスラエルを支援する理由の一つとなっています。また、ユダヤ人社会からの多額の資金援助を期待するアメリカの政治家にとっては、なかなかイスラエルを非難できない状態です。知人のアメリカのシンクタンクの研究者が言うには、支援の一番大きな理由は経済、マネーだと言っています。しかし、状況は常にアップデイトされるもので、いつまでも古い理由だけに固執するのは難しいです。人の心も変わります。現代人は人権意識が強いです。数多くのガザ市民が犠牲になっている状況に、アメリカでも、パレスチナ人に同情する動きが強まっています。

日本はどういう立場をとっているかというと、パレスチナの自治を早く認めています。オスロ合意の十六年前、一九七七年には、パレスチナを認めて、東京事務所が開設されて、交流しています。また、パレスチナがオブザーバーとして国連に参加するというのも、いち早く承認いたしました。また、小泉純一郎首相のときは、「平和と繁栄の回廊」という名前の平和プロジェクトを作り、イスラエル、パレスチナ、それから、隣国のヨルダン、日本の共同作業で、パレスチナ人の経済的自立を図る事業も行っています。ジェリコ農産加工団地とかですね。

そして、イスラエルに対してですが、ヨルダン川西岸のパレスチナ自治区にイスラエル人が入植して、自分たちのコミュニティを作っている。これは国際法違反だと、イスラエルを強く非難する声明を日本政府が出しています。しかし、イスラエルは国際社会からの非難の声を無視して、入植を続けているという状態です。イスラエルは、パレスチナといつでも、交渉の用意はできているのだけれども、パレスチナ自治政府が分かれているから行えないという理由を述べています。パレスチナ西岸は、マハムード・アッバス議長を代表とする穏健派ですが、ガザ地区というのは強硬派、ハマスが支配している。そういう状況です。

では、なぜ国際社会に紛争が起きても、国際法に違反する国があっても、それを罰することができないのか、という話をしたいと思います。一言で言えば、国際社会には、国際法に違反した国に対して刑罰を与えるような機関はない、強制的な刑罰はないという状況です。国連の安全保障理事会が、制裁を行うと決定したとしても、それは経済制裁か軍事制裁で、しかも、強制的な罰ではなく、制裁を受けた国が反撃することも可能です。制裁を受けたら困ると思うような小さな国でしたら、その国連決議に従うかもしれませんが、大きな国は制裁を無視することも可能です。それに対して国連には何の手だてもない。常駐する国連軍はありません。結局は、同じ気持ちの国が、共同で経済制裁をする。多国籍軍を構成して軍事制裁を行うというのが、精いっぱいのことなのです。

復習的な内容になりますが、世界には約二百の国と地域があります。国というものは、領土、国民、そして、政府いわゆる統治機構、これらがあることによって国の形が整います。そして、統治機構である政府というものは、国民を守る責任がある。また、資本主義社会にあつては、経済成長をして、経済を回さなければ社会が成り立ちませんので、経済成長をさせる責任があります。また、国民から税金を徴収する。それから、刑罰権、外交など、これらは国の仕事です。

このようにして成り立っている国が、世界には約二百あります。国際社会では、色々な約束事を守って、平和に暮らそうということになっています。その約束事というのが、国際法といわれているものです。これは先ほど、強制力はないものと説明いたしました。また、国際社会にはもう一つ、約束事があります。それは、「内政不干渉の原則」というものです。内政、国内のことには、他国が干渉してはいけなく、という決まりがあるわけです。

この「内政不干渉の原則」に則った結果、ビアフラ難民を助けられなかったことがあります。一九六七年に、ナイジェリアの東部で、イボ族が独立を企てて、ビアフラ共和国を建国しました。ナイジェリア政府にとっては、これは内乱ですので、反乱を阻止するために包囲網を作って、イボ族を虐殺しました。ナイジェリア政府がビアフラを包囲

し、食料や物資を遮断した結果、食糧難や病気などによって、百五十万人の人が死亡しました。このような悲惨な写真が世界に流れても、世界の国々は、内政不干渉の原則によって、どうすることもできないような状況でした。それでも、人道的に助けるべきではないか。国家として何もできないならば、ということ、NGO（非政府組織）である「国境なき医師団」が結成されることになりました。国家レベルでできないことは、NGOが人道支援という名目で、その国に入って活動するという形が執られています。

では、国内の法律について、考えてみてください。法律には強制力があります。違反すれば、当然、刑罰があります。最終的に決定された刑罰からは逃れられない。そのような強制力があることで、社会の秩序が保たれています。もし法律に強制力がなかったら、これはしてはいけませんという規範がなく、刑罰がなかったら、殺人事件がもつと増えるかもしれないし、交通違反も増えるかもしれない。法律に強制力がなかったら、こういう状況が増えるかもしれないということです。ここで復習になりますが、国際社会の基本は、国家が基本単位になります。独立国、一国一国の上に何かを強制するものではありません。そして、国際間の秩序を保つために存在している、国際法を守らない



photograph by Don MacCullin / Contact Press

国に対して、強制的に処罰を行う組織は国際社会には存在しません。国際法違反に対する強制的な刑罰もないということです。しかし、大方の国は、国際法を守って平和を保ち、地球全体の問題を協力し合おうとしています。これらは全て善意の上で成り立っております。

ちなみに、国際法というものには、国際法一条、国際法二条というものがあるわけではありません。国際法とは、主に、「条約」と「国際慣習法」のことをいいます。「条約」というのは、国と国の取り決め、約束事です。その条約に加盟している国がその条約を守らなければ、国際法違反となるわけです。条約に加盟していなければ、その条約を守らなくても、国際法違反にはならない。日本は、国際法を遵守するということを国是としていますから、守れない条約には加盟しない。例えば、鯨に関して、商業捕鯨に否定的な条約を守るのは難しいとして、日本は二〇一九年に国際捕鯨委員会（IWC）から脱退しました。それによって、日本は捕鯨に関する縛りがなくなりました。また、「国際慣習法」というのは、昔からよくないと言われていて、社会的な規範のことです。例えば、他国を武力で侵略するのはよくない、これは国際慣習法であり、それを破れば国際法違反となります。しかし、独立国、一国一国の上には何かを強制するものではありません。ここで、自国の勢力を広げたいという野心を持った国が出てこない保証はありません。ということ、自国の安全は自国で守る。そして、力が弱い国は、同じ目的を持つ国と同盟を結ぶというのが、国際社会の原則となっております。

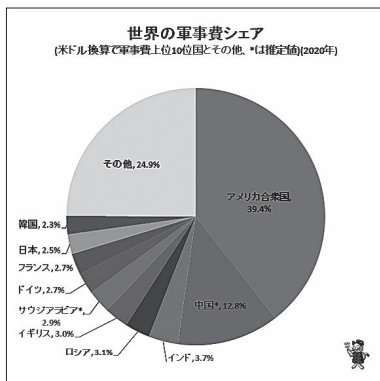
このようなことを言うと、皆様から「この人は軍国主義だ」とか、右翼だとか思われてしまいそうで嫌だなと思っております。私は、実際には、「武器」とか「戦う」といった言葉を聞くだけでも、ぞっとしてしまいます。しかし、自国民の安全を守る責任がある政府は、現実社会に対応しなくては、国民の安全は保つことができません。平和を望む理想を掲げない政治はだめですが、一足飛びに理想は実現しません。現実的に可能なことから、一步一步解決していくことが、政治の役割だということになります。

例えば、どうすれば恐ろしい核兵器をなくすことができるか。核なき世界を目指すために、具体的にどのよう手段を踏めばいいのか。どうすれば実現するのか。そのことを話し合うために、有識者会議が開かれています。しかし、結局は、今のところ手だてがない。「せめて軍縮を」ということで、日本は軍縮会議に力を入れて、世界会議を日本で主催しています。何とか良い知恵はないかと模索しているわけです。しかし、核兵器のない世界の実現は難しいのが現状です。何もしていないわけではないのです。永世中立国のスイスに憧れている方も多いと思いますが、スイスは国民を守るための強力な軍隊を保有しています。第二次世界大戦中、スイスの領空を飛ぶ飛行機は、連合国であれ、枢軸国であれ、撃ち落としました。ベルギーも中立を宣言していましたが、国を守る力が弱く、あつという間にドイツに侵略されてしまいました。戦争をしないと宣言すれば、どこも攻めてこないというのは、あまりにも楽観的なことでして、侵略されなくても、弱ければ武器で威嚇され、経済的利益を吸い取られるということもありうる話です。そういう現実に対処するために、自国の安全を守りながら、理想は常に忘れず国際法を守って平和を保とうというのが、大方の国々の望みなのです。

そして、外交の重要性。話し合いは、力の強い大国の要求が強く通ります。しかし、小国も、何とか自分たちの主張を聞き入れてもらおうと、必死に交渉するわけです。先程も、百パーセント一方的に通る外交はないと申しました。割合はどうであれ、ギブ・アンド・テイクになります。よく「アメリカの核の傘に守られている日本は、アメリカの言いなりだ」と言う方がいらっしゃいますが、経済交渉などでは物凄いバトルをしています。外交資料を読んでいると、アメリカの強い要求に、ノーを突きつける場面が多く出てきます。先日、ある定例会で、前駐米大使がおっしゃっていました。自分が駐米大使のときに見た経済交渉では、その時の経産省の大臣が、交渉の際に、アメリカ側が机をバーンと叩いて、「なんで言うこと聞かない」と強く要求してくる。それにもかかわらず、刃向かって交渉していた。もう最後の最後まで粘って、粘って、粘って、こういう数字を獲得した。「日本を代表して交渉している。流石だな

順位	国名	単位（百万US\$）
1位	アメリカ合衆国	26,854,600
2位	中国	19,373,586
3位	日本	4,409,738
4位	ドイツ	4,308,854
5位	インド	3,736,882
6位	イギリス	3,158,938
7位	フランス	2,923,489
8位	イタリア	2,169,745
9位	カナダ	2,089,674

IMF（国際通貨基金）



と「思った」と、こういうふうにおっしゃっておいりました。

それと、国交というのはお互いに大使館を置いて、人と人の交流をする。経済的交流、文化的交流をする。また、同盟国というのは情報の共有、安全保障の協力を行う。北朝鮮からのミサイルの情報というのは、米韓同盟と日米同盟、そういう関係で情報が日本に入ってきます。

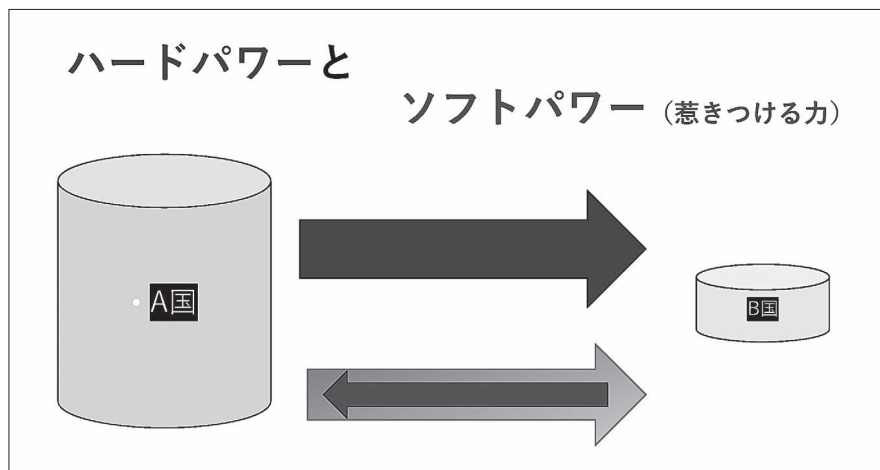
さて、今まで「大国」「大きな国」「弱い国」「小さい国」といった表現を使ってきましたが、一体、大国とは何でしょうか。国力のことを政治学では、「パワー」と呼んでおります。パワーとは、自分の望む影響を他国に与える力、それが強いと、大国といわれるわけです。他国に影響を与える力の源泉のうち、最も割合の大きいものは、「軍事力」と「経済力」だといわれております。

皆様にお配りした資料は、ストックホルム国際平和研究所が出しているものです。こちらの円グラフは二〇二〇年のものです。二〇二二年になると、インドとロシアが入れ替わって、ロシアが三番目になっています。それと、九番目、十番目の日本と韓国、これが入れ替わりまして、韓国の方が、軍事費が多くなります。日本は十位と、このような軍事費のランクになっております。それから、経済力では、アメリカ、中国、日本と並んでいます。もうすぐインド

が日本を抜かして三番目になるといわれています。

では、そのパワーの源泉の使い方を見ていきたいと思います。こちらの図をご覧ください。図の左側は経済支援をする国、A国と書きました。B国に対して経済支援をします。「あなたの国は困っているでしょう。立派な橋を造りましょう。建物造りましょう。インフラ整備をしましょう」、そうやって経済支援を行います。そういうときに、A国はB国に対して都合の良い要望を突きつける。そうすると、支援される国というのは、それに反発することができないから、嫌々ながらも、その要望を受け入れるしかない。

こういう形の経済支援の他に、もう一つの方があります。経済支援をするときに、「あなたたちの国が豊かになって、貧困が減るように、あなたたちの国の人たちに技術を教えます。共に手を取り合って進んでいきましょう」という形の経済支援でしたら、どうでしょうか。きっと、そちらの方がありがたいと思ってもらえるのではないのでしょうか。もし何かあったら、その国に恩返しをしたいと思う気持ちが芽生えるかもしれません。その気持ち、相手からいいなと思ってもらえる。それが、「ソフトパワー」と言われるものです。ソフトパワーは、相手の国を惹きつける力のことです。同じ経済支援でも、ソフトパワーが生まれるような支援であれば、経済



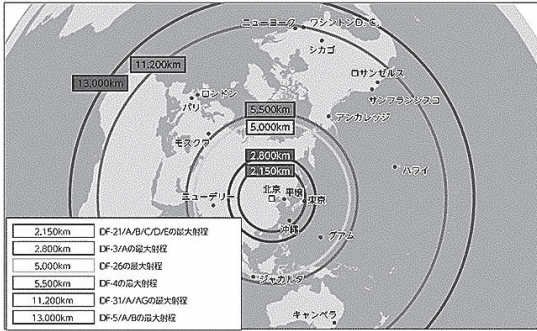
支援をした国は、思った以上に、もっと影響力を持つ国になるかもしれません。このソフトパワーという言葉を生み出した、ハーバード大学のジョセフ・ナイ教授は、「日本にはソフトパワーの源泉がいっぱいある」と言っています。親国家が増える理由がいっぱいあるのだと思います。このことについても、後ほど考えていただきたいと思います。

そして、ソフトパワーという言葉ができたので、今までのパワーのことを、「ハードパワー」と呼ぶようになりました。軍事力について言えば、「何か言うことを聞かなかったら攻撃するぞ」と、実際に、物理的に攻撃する、または威嚇する。これはハードパワーになります。これは相手の国を嫌々ながらも従わせています。しかし、軍事力で、地震や津波による災害の復興を手伝ってくれたら、協力や支援をしてくれたら、どうでしょうか。同じ軍事力の中でも、ソフトパワーが生まれるのではないのでしょうか。何かあったら恩返しをしたい、ありがとうという気持ちが生まれるでしょう。経済力でも、「あなたたちのために頑張って支援しましょう」と言えば、ソフトパワーが生まれます。しかし、「言うこと聞かなかったら、経済支援を止めるぞ」と言ったり、経済制裁を行ったりすれば、それは経済力を使ったハードパワーとなります。

国力の源泉には他にも、地理的条件や人口、科学技術などがありますが、そこから生まれるソフトパワーも沢山あります。魅力、憧れ、国民性、多くの国から信頼を置かれる国、多くの国から支持される国であること、これがとても大事なのではないかと思います。惹きつける力によって国力は更に強くなるのではないのでしょうか。国際政治というのは、国家のやること、個人個人の私たちは関係ないことという話ではなくて、個人個人の力が大きなソフトパワーを生み出すと思います。このソフトパワー、惹きつける力の中には、仏教の力、そして、お題目の力も含まれているのではないかと思うのですが、いかがでしょうか。ここが私の話の最大の山場かもしれません。ソフトパワーという惹きつける力には、仏教の力、お題目の力があるのではないかと思っております。

次に、現実的な話をしたいと思います。こちらの資料（次頁）をご覧ください。これは中国の北京を中心としたミサ

図表1-2-2-2 中国（北京）を中心とする弾道ミサイルの射程（イメージ）



(注) 上記の図は、便宜上北京を中心に、各ミサイルの射程明瞭範囲を概略のイメージとして示したものである。

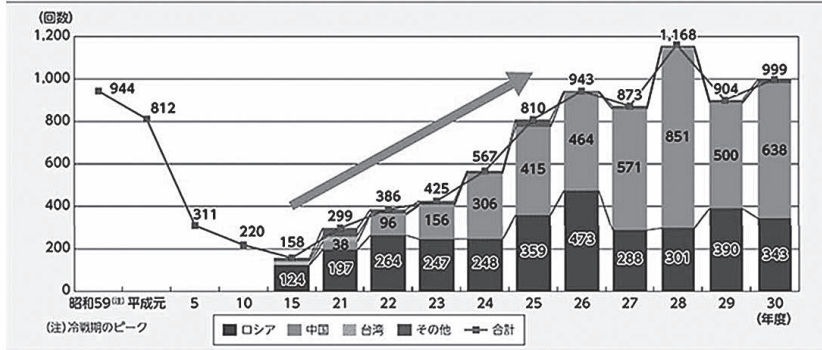


イルの射程距離を表した図になります。この図のうち、DF-21というのが、日本に対して向けられているミサイルです。よく北朝鮮のミサイルがどうのこうのという話になりますが、実際に、中国もこのようなものを日本に向けています。

それから次に、こちらの図をご覧ください。図の白い部分、これは日本の排他的経済水域です。ここは、日本が色々な海底調査をいいという権利を持っている水域なのですが、そこに中国船が勝手に入ってきて調査することがあります。しかし、日本は向こうが攻撃してこない限り、こちらから攻撃をしないことになっておりますので、

航空自衛隊緊急発進回数 対中国機 675回 対ロシア機 268回（令和元年）

図表Ⅲ-1-2-3 冷戦期以降の緊急発進実施回数とその内訳

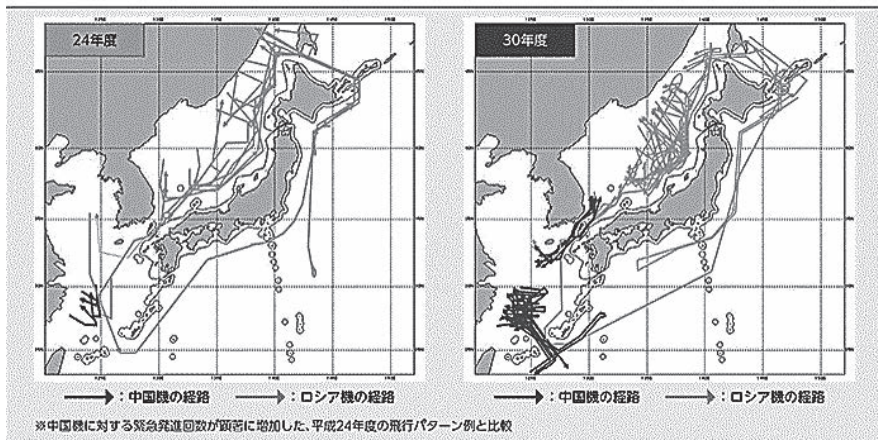


水をかけて出ていけと言う他ないわけです。

それから、こちらは航空自衛隊が領空に近づいてくるロシア機と中国機に対して、緊急発進を行った回数を図に表したものです。二〇二〇年だけでも、中国機に対して六百七十五回、ロシア機に対して二百六十八回の緊急発進を行っています。昨年度、昨年の四月から今年の三月までで、中国機に対して四百七十九回、ロシア機に対して百七十四回、台湾一回、北朝鮮二回、国籍不明機に十三回、計六百六十九回、日本の領空に近づいてきた航空機に緊急発進、スクランブルをかけています。

どのように飛ぶかという点、この図（次頁）をご覧ください、この図の右側の方です。赤い線は、中国機が飛んだところ。黄色い線はロシア機で、こちらは時々、日本の周りを一周回っています。この前の中国機による長崎沖での領空侵犯では、宮崎県の新田原基地と福岡県の築城基地から、自衛隊機が緊急発進をして、中国機に対して「日本の領空に近付くな」と警告をするわけですね。中国機が少しの間、日本の領空に入ってしまったけれど、すぐに追い出しました。この辺り、関東近辺ですと、茨城県の霞ヶ浦北の百里基地から、情報が入ったら、五分以内に飛び立ちます。自衛隊は、このような臨戦態勢を執って、日本の空を守ってくれ

図表Ⅲ-1-2-4 緊急発進の対象となった航空機の飛行パターン例（イメージ）



ています。私たちが、「ああ、今日はいいい天気だな」と青空を眺めるときに、中国やロシアの偵察機が飛んでこないように、常に空を見守ってくれているんだなど、思ってくださいさるといいかなと思います。

最後に、問いかけになりますが、戦争はすべていけないのですか。理不尽な侵略に対して、自由や独立、支配されないために戦うこともいけないことだと見做しますか。平和のためなら今までの自由や民主主義、自決権といったものを犠牲にして、国土が半分になったら、植民地化されてもいいのですか。いいわけがないのですけれども、領土を取られたら、話し合いで解決して取り返すのは、実際には難しいということです。そういう状態にならないよう、侵略されないようにするにはどうしたらいいのか。自国の平和は自国で守るのが原則です。他国が命を懸けて助けてくれますか。和平交渉は力の強い国の意向が大きく反映されてしまいます。こういうことを書くのと、勘違いされることがございますが、これは決して軍国主義を煽るものではありません。多くの国が、現在の国境線を守って、平和に生活したいと願っています。自国の領土領海を拡張したい国があるという現実、どう対処するかということをしつかり考えることも、大事なことではないかと思えます。

もう一つ、大国から侵略されている小国の犠牲を見ながら、大国

の意を受け入れて自国の平和・安定を望みますか。これも難しい問題です。例えば、今回のウクライナ侵攻では、日本はウクライナのことを支援しています。けれども、日本はエネルギー資源の九割を外国からの輸入に頼っています。G7が結束してロシア産石油の輸入を原則禁止としたときに、日本でも同じような措置を執ってしまったら、日本社会は混乱してしまいます。G7の他の国たちと歩調を揃えることができない国内事情があります。そこをうまくやるために、日本は徐々に輸入を減らすという方針を打ち出しました。また、ロシアにおける油田や天然ガス田の開発プロジェクト、サハリン1、サハリン2についても、日本は、エネルギー資源の確保のために、この権益を捨てるわけにはいかない。それぞれの国の事情があるということです。自国の平和を犠牲にすることなく、何とか犠牲になっている小国を助けられる方法はないのでしょうか。このような課題が、私たちに突きつけられていると思います。

もう少しだけ付け加えます。世界の避難民の数についてです。昨年の時点で、一億一千七百万人の人が避難生活を送っています。これは、世界の総人口から考えると、約八十人に一人が避難民なのだということを頭に入れていただきたいです。それから、各国の核弾頭配備数と保有総数、このような図（次頁）を作ってみました。このような現実の世界にどう向き合っていくのか。多くの国は、現在の国際法を守り、国境線を守って、平和に生活したいと願っています。しかし、一方で、何とかして自分の統治権益を維持したいという国もあるわけです。北朝鮮では、金一族が支配を維持したい。中国では、中国共産党の統治を盤石なものにしたい。それを実現するには、経済的發展を遂げて、国民生活を豊かにしなくてはならない。そのためにも自国の領土領海を拡張したいと思っている。日本の近辺にはそのような国が存在しています。そのような現実を見ながら、世界の平和と共に、日本の平和・繁栄を考えていただきたい、その参考になればと思います。

最後に、皆様のお考え、それぞれ違っていることと思います。「何を言っているんだ」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。しかし、様々な意見を出し合い、違いを受け入れながら、それをうまく消化していく方法を見つ

各国の核弾頭配備数と保有総数			
	2024年		23年
	配備数	総数	総数
米国	1770	5044	5244
ロシア	1710	5580	5889
英国	120	225	225
フランス	280	290	290
中国	24	500	410
インド	—	172	164
パキスタン	—	170	170
北朝鮮	—	50	30
イスラエル	—	90	90
合計	3904	12121	12512

ける。これが大事なことなのだと思います。政府を批判しても捕まることがない、平和な日本にいと、国民が持てる有難い権利も当たり前になってしまいます。また、二十四時間、三百六十五日、日本を守ってくれる方たちがおかげで、私たちは安心して生活することができています。これは自衛官だけではなく、海のパトロールをしてきている海上保安官や、国内の治安を守る警察官や消防官もそうです。そういう方々が、我々の生活を守ってくれていることで、我々が平和に、それも戦争がないだけでなく、穏やかに安心して暮らしていけるということ、常に忘れてはいけなのではないかと思っております。

これで、私の話を締めくくりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

菅野 池上萬奈先生、ありがとうございました。

続きまして、**鵜飼秀徳先生**より、「近代以降の日本仏教諸派の戦争に対する立場と主張について」と

いうタイトルでのご講演をいただきます。鵜飼先生については、ご存じの方も多いとは思いますが。浄土宗の京都の正覚寺様というところでご住職をされておられます。主に「宗教と社会」をテーマに取材を続けているジャーナリストでもいらっしやうて、オウム真理教事件でありますとか、東日本大震災、チェルノブイリ原子力発電所等々の取材現場に足を運んでおられます。著書である『寺院消滅』も有名かとは思いますが、『仏教の大東亜戦争』、『仏教抹殺』等の本では、近代の日本仏教諸派の、政治あるいは社会状況との関わり合い、そういったことについても論じられておられる先生でございます。

それでは、鵜飼先生に発表をお願いします。

近代以降の日本仏教諸派の戦争に対する立場と主張について

鵜飼 皆さん、おはようございます。鵜飼でございます。よろしくお願いいたします。ご紹介いただきましたように、私は京都の嵯峨嵐山にある正覚寺の住職をしております。檀家さんが百軒ほどの小さいお寺ですので、兼業型住職ということになります。うちの先代の住職である父親、そして、先々代の祖父も兼業をしておりました。私も大学時代に修行に行きまして、浄土宗の教師資格を取ったのですが、その後は新聞社、出版社等に勤めまして、政治部や社会部、経済部など、かなり広いジャンルに亘って取材をしてまいりました。今日のテーマで言いますと、実は北方領土問題が専門でございます。現地にはちょこちょこ行ってまいりました。

今日は、「仏教の戦争責任」ということについて、お話しをさせていただきますが、当然、四十分では語りきれません。二冊、本を書きましたので、ご興味がありましたら、精読していただけるのが一番ありがたいと思います。

さて、なぜ慈悲を説く仏教教団が、殺戮行為に加わったのかということについてです。それすらも、若いお坊さん

はピンと来ないというか、「そんなこと、あったのか」と思われるかもしれません。昨年、私は『仏教の大東亜戦争』という著作を出しましたが、そのきっかけは、まさに私の先ほど申し上げました祖父が、お坊さんでありながら志願兵であったということを、孫である私に説いたんですね。運よく、祖父は長崎に出征をして、そこで特攻機に乗ることなく戻ってくることができたわけですが、うちのお寺の長押のところには、実はまだ、「開戦の詔」という、天皇陛下からいただいた文書が掛けてあります。恭しく掛けてあります。

うちのお寺に、また、皆さんのお寺にも、戦争の痕跡といえるものが必ずございます。天皇を敬う、天牌というのが必ずございます。あるいは、皆さんの境内墓地には、英霊の墓、「奥津城」と呼ばれているものがあります。このような様々な、極めて違和感のあるものが、未だ疑問なく、無批判のまま祀られ続けている。こういったことへの疑問から始まりました。そして、色々な資料を集める、各地に取材をしながらヒアリングする。あるいは、実際に戦地に行ったお坊さんから聞き取り調査をするということが続けてまいりまして、一冊の本にいたしました。

いきなり仏教教団が、戦争に加担したわけではありません。連綿とつながるこの仏教と権力構造の中で、ある一面としては、致し方なく戦争に加担をしてみたという側面もあれば、極めて積極的に、教線の拡大のために能動的に参加をしたような事例もあります。いずれにしても、わずか八十年前に、仏教教団が世にも無残な行為に参加したことは、事実であります。

少し遡ると、まず明治維新のときの、神仏分離令というところから、話を進めなければいけません。江戸時代の宗教と明治以降の近代の宗教というのは、全然違います。全く宗教構造が違うのです。江戸時代のお寺というのは、お寺も神社も、仏教も神道も、陰陽道も儒教も道教も、ぐちゃぐちゃに入り交じったような、ミックスジュースのような組織、施設、それがお寺だったんですね。

ところが、明治元年（一八六八年）、慶応四年にもなりますが、このときに神仏分離令というものが出ました。そ

れぞれ宗教は宗教として、単体として独立したものとして存在しろと、ごちゃごちゃ混じっているのはだめだと。なぜなら、そこから、いわゆる神道を取り出して、国家と一体化させるためには、仏教から、あるいは、そういう混淆した宗教から、神道を取り出す必要があったわけです。それで、結局取り出せない。混じり合って、仏教なのか神道なのかよく分からないような伽藍、あるいは、神像、偶像、そういったものが大々的に破壊されます。

これが、廃仏毀釈というものでした。江戸時代にはお寺が、現実的な数としては、九万ヶ寺はあったといわれています。当時の人口は、約三千万人から三千五百万人です。今、お寺の数は七万七千ヶ寺ですから、江戸時代の方が今よりもはるかにお寺が多かったわけです。これが明治十年までに半減します。九万あったお寺が四万五千まで減らされます。鹿児島県はお寺がゼロになりました。お坊さんもゼロになりました。今でも日蓮宗の鹿児島県のお寺というのは殆ど無いはずですが、もっと言うと、鹿児島県は仏教由来の重要文化財、国宝がありません。すべて壊されました。宮崎もそうです。宮崎もほぼ壊されました。土佐、高知県も似たようなものです。今のお寺の経営や寺院分布には、廃仏毀釈が大きく影響しています。逆に、廃仏毀釈が緩かった地域の一例は、愛知県です。愛知県は、現在でも四千六百ヶ寺のお寺があります。ですから、愛知は廃仏毀釈が非常に緩かったわけです。

徳川幕府の時代には、権力構造が仏教を庇護しました。そこから新しい政府に切り替わって、国家仏教から国家神道に切り替わった時に、仏教が迫害をされ、仏教は再起不能のような状況になります。そこから立ち直るために、新しい政府の方にすり寄って行かざるを得なかった。こういう側面があります。

もう一つは、江戸時代に迫害されていた浄土真宗ですね。当時、一向宗と言いましたが、一向宗が新しい権力に変わった時に、ずっとそこにすり寄り、浄土真宗が主体的になって、廃仏毀釈を収めていきます。浄土真宗は、新政府に対して多額の資金援助をしました。実は、廃仏毀釈が収まったのは、浄土真宗の力がかなり大きいのです。浄土真宗が無ければ、今の仏教界なかったかもしれません。ただし、その後、浄土真宗が主体的になって戦争に加担してい



(図1) 廃仏毀釈により破壊された仁王像

きます。もちろん、私の所属する浄土宗もそうです。そして、日蓮宗もそうです。

具体的に、少し写真を見ていきましょう。これは廃仏毀釈の写真なのですが、明治の初期には様々なことが行われました。(図1) お寺の上知、これはお寺の境内地の取り上げです。恐らく、池上本門寺も取り上げられているはずです。例えば、京都には非常にお寺が多いです。同志社大学は明治時代に作られました。同志社大学の中には、相国寺という臨済宗相国寺派大本山が入っています。これは、まさに明治初期の上知の影響によるものです。普通は逆です、相国寺の方が歴史は古いからです。相国寺の境内地が取り上げられて、大学になって、そして旗竿地になって、同志社の中に入り込んでいるというような、こういうことがあります。つまり、新しい国家作りをする上で、土地、財産を宗教法人から召し上げて、そして、軍備費あるいは土地開発、そういったものに使われていったわけです。

お坊さんも、俗化政策が取られていきます。明治政府から「肉食妻帯蓄髪等勝手たるべし」という布告が出されました。肉を食べてもよし、結婚してもよし。あるいは、髪の毛を生やしてもよしという、こういう状況も生まれてきました。国家神道を作る上で、仏教を、相対的に地位を下げていくというようなことが、新しい政府にとって大切になってきたということです。それまで、仏式の葬儀である火葬、江戸時代は火葬と土葬の混在でした。火葬は仏式のお葬式ですが、新しい政府になって、神道式のお葬式をするために、法令によって通達をしました。火

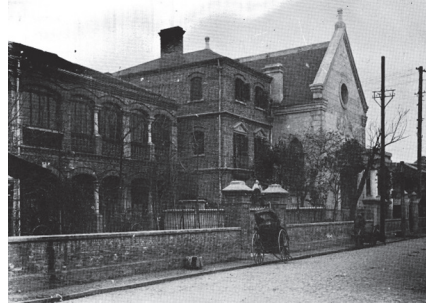
葬禁止令です。だから、百パーセント、明治初期に土葬になります。これによってできたのが、都立青山霊園や雑司ヶ谷霊園、谷中霊園などです。庶民の慣習、葬送、文化、そういったものも、この時点で、かなりがらっと変えられたわけです。

このような状況の中で、仏教的な慣習、文化、あるいは、仏教の伽藍、お坊さん、こういったものが徹底的にダメージを受ける中で、生き残りをかけて仏教が変質していきます。例えば、増上寺。増上寺は、「大教院」という神道教化の施設になりました。つまり、国家神道を教える組織になっていくわけです。そして、先ほど申し上げました、浄土真宗の戦争協力の発端は、岩倉使節団というものです。岩倉使節団と言うと、当時、外国船が入ってきて、日本は不平等条約を結ばれた。その不平等条約の改正の下ならしのために、岩倉具視、そして大隈とか、こういった政府要人が欧州の視察に行く。実はもう一つ、大きな使命がありました。これは、欧米の教会、キリスト教を学ぶということ。つまり、キリスト教と国家の関係性を学びに行ったのです。そこに実は、浄土真宗の東本願寺、西本願寺の幹部が同行したんです。ここでかなり接近します。そして、浄土真宗と新政府の間で、新しい国作りが進められていきます。欧米型の一神教のキリスト教、つまり、欧米の列強はなぜ強いのか。それは、一神教であるキリスト教を使って、人々を束ねて、強い宗教の下には強い国家があるからだ、こういうことを学んでくる。こういう国家と宗教の関係を、近代日本の中に植えつけようとしたわけです。そのブレーンに、浄土真宗が入っていったということです。皇道仏教という考え方ができました。

「この世は迷いの世界で、煩惱に満ちている。真理の在り方は状況や時世によって変わりうる。そして、仏教思想そのものは、現実社会という基盤があつてこそ成り立つ。だから、世俗的な真理は、それはそれで深く探究しなければならぬ。ありがたいことに、この世には絶対的な存在、天皇がいる。その天皇を敬い従うことで、我々は現世で救われている」



(図3) 西本願寺台湾別院
(明治34年9月下旬)



(図2) 東本願寺上海別院
(明治41年3月竣工)

こういう理屈によって、仏教の変質が起き始めるわけです。屁理屈ですね。例えば、浄土教で言えば、「あの世は、阿弥陀仏が救ってくれるんだ」と言うわけです。ところが、「阿弥陀さんは随分遠い存在だ。現世を救ってくれるのは天皇さんなのだ」と、こういう理屈ですね。だから我々は、現世では天皇を敬わなきゃいけないのだと、死んでから阿弥陀さんのところへ行けばいいと、こういう屁理屈が生まれていきます。

そして、明治新政府が、大陸へ植民地政策に出ています。これは、北海道開拓を一つのモデルにしているわけです。村ごと、そこにお寺がついていて、入植をするということです。これを、やはり浄土真宗が主体的に行っています。日本の軍隊と共に、最初は軍人の慰霊、戦死者の慰霊。そして、励まし、慰め。こういったことを、各教団から派遣された僧侶が、戦地に行っているわけですが、それによって、現地のお坊さんが変質をしていくわけです。当然、それだけでいいのかという話になります。自分たちは武器を取って戦わなくてもよいのかと、こういうジレンマに苛まれ、実際に戦闘に加担をしていくようになります。

まず、明治九年に、東本願寺上海別院というものが建てられています。これは、当時の貴重な写真です。(図2) 明治四十一年ぐらいの上海別院です。これだけ立派なレンガ造りのお寺が建てられています。各宗派、競うように建てられます。こちらは、台湾に作られた西本願寺の別院です。(図3) これは、



(図5) 浄土真宗の従軍僧



(図4) 満州に開かれた曹洞宗の興山寺

満州に開かれた曹洞宗のお寺の開山式の様子です。(図4)

そして、先ほど申し上げました、従軍僧が現れ始めます。戦死者の弔いだけでなく、ちょうど写真の真ん中に、手を合わせているお坊さんがいますね。(図5)

これは浄土真宗の従軍僧ですが、戦死者の前で、お経を唱えております。皆さんの教団の中にも、当然このような従軍僧はいたわけです。日清戦争の時はまだよかったです。日露戦争になってくると、かなりエスカレートしてきます。これは、浄土真宗本願寺、西本願寺における植民地開教、つまり、大陸にお寺をどれだけ建てたのかということを示した図です。(図6)

浄土真宗本願寺派、西本願寺派だけで、第二次世界大戦が終わるまでに、三百六十八ヶ寺のお寺を建てています。

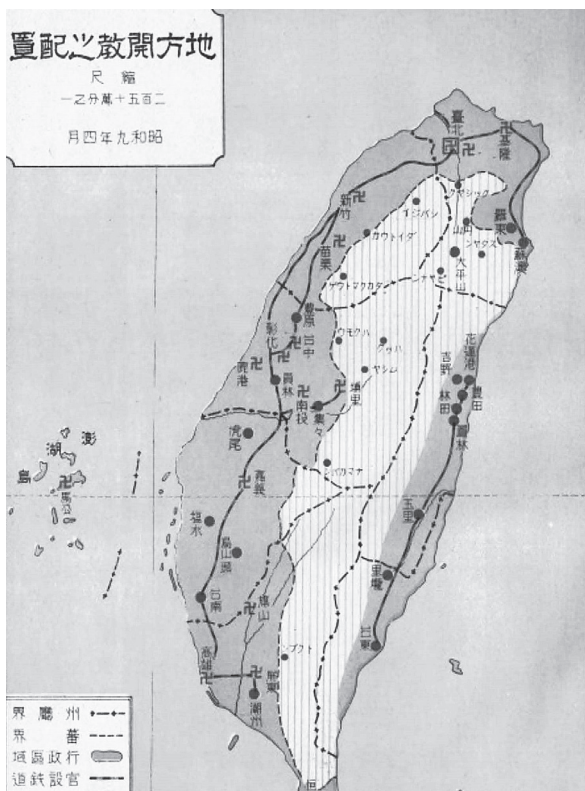
浄土真宗本願寺派における時局別の植民地開教状況	1895-1903 (日清戦争)	1904-1909 (日露戦争)	1910-1918 (第一次大戦)	1919-1930	1931-1936 (満州事変)	1937-1945 (大東亜戦争)	不詳	計
シベリア	2	0	0	1	0	0	0	3
樺太	0	7	2	4	0	0	26	39
台湾	7	9	6	16	5	14	6	63
朝鮮半島	1	9	33	29	23	13	24	132
満州	1	11	3	4	15	24	11	69
中国	1	3	1	1	1	35	5	47
南洋	1	0	0	2	5	7	0	15
合計	13	39	45	57	49	93	72	368

長谷川篤人 | 近代日本僧侶の別院本堂建設における「植民地開教」 書籍(2011)

(図6) 浄土真宗本願寺派における時局別の植民地開教状況

満州における日本仏教各宗派布教所数 (1944年2月時点)	
真宗大谷派	80
浄土真宗本願寺派	53
真言宗	40
曹洞宗	37
日蓮宗	34
浄土宗	28
日本山妙法寺	17
臨濟宗	9
天台宗	2
浄土真宗興正派	1
時宗	1
華嚴宗	1
〔真宗〕1968年9月号	

(図7) 満州における日本仏教各宗派布教所数



(図8) 浄土真宗本願寺派の台湾進出

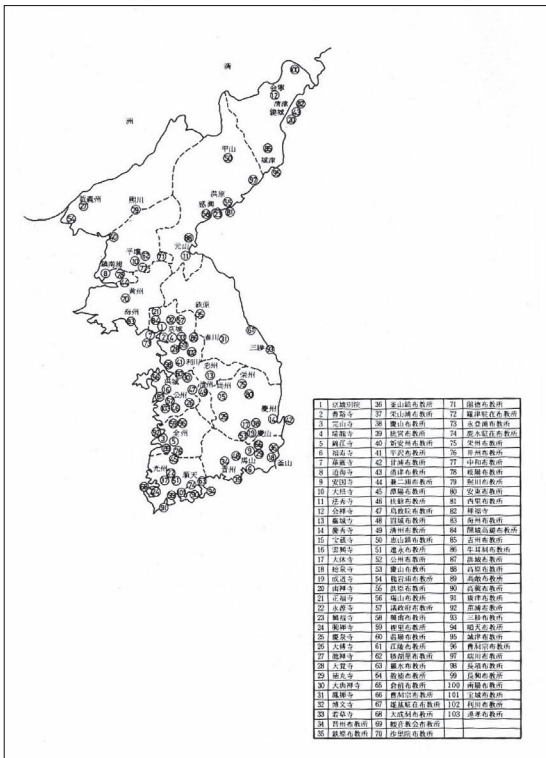
これは、満州だけでどれぐらいのお寺が建てられたのかを図にしたものです。(図7) 一九四四年、終戦間際ですが、真宗大谷派、東本願寺です。満州だけで、八十ヶ寺のお寺を建てています。西本願寺は五十三ヶ寺、真言宗は四十ヶ寺、曹洞宗は三十七ヶ寺、日蓮宗は三十四ヶ寺のお寺を建てております。つまり、国家におけるお寺、植民地化政策にとつての宗教施設というのは、極めて大きな意味を持っていました。

私も北方領土に何度か行っておりますが、やはり北方領土の占領政策も同じです。終戦後、一九四五年の八月十五日以降に、北方領土にソ連軍が侵攻してきます。その時に、ロシア正教、東方正教会が同時に北方領土に進出をして

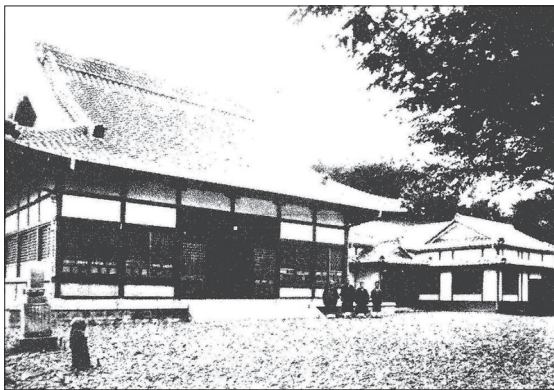
いて、まず、最初に造ったものが教会であります。だから、今、北方領土の最もいい場所に、最も壮麗な施設として建てているのが、正教会の教会です。日本のお寺はすべて壊されました。

こちらは台湾における西本願寺、浄土真宗本願寺派のお寺の場所に赤いスポットで打ったものです。（図8）西本願寺、台北別院を拠点にして、大東亜戦争終了までに六十三ヶ寺も建立しております。

これは、曹洞宗の朝鮮開教です。曹洞宗のお寺が、朝鮮半島のこのポイントのところ建っていったということですから。（図9）曹洞宗の錦江寺というお寺、朝鮮半島にこのようなお寺が建てられました。（図10）ほとんど内地の伽藍の作りと変わりません。立派なものであります。



（図9）曹洞宗の朝鮮開教



（図10）明治42年に開かれた曹洞宗錦江寺（韓国全羅北道群山市）



(図11) 日中戦争における従軍僧
(本願寺派)

太平洋戦争になってくると、このようなスタイルになってきます。(図11) 先ほどの従軍僧とは少し違います。折五条を掛けて、しかもそれをベルトに挟んで、ゲートルを巻き、そして髭を生やしていて、お坊さんには全く見えません。もう完全に軍人です。日蓮宗も同じです。

そして、仏教教団は零戦を寄贈しています。日蓮宗も何機か献上しております。確か「立正報国号」という名前をつけて、献上しております。仏教界で、判明しているだけでも五十一機が献上されております。一番多いのは浄土宗でありました。浄土宗が一番多いですが、浄土真宗は、実は軍用機ではなく、軍艦を献納してあります。全然費用が違います。

ちなみに、今の貨幣価格に換算すると、零戦は一機一億八千万円くらいの価格になっていますので、相当な資金を檀家さんから徴収をし、本山に納めて、その本山が軍用機を造っていく。もしくは、大きなお寺ごとに軍用機を献納するというようなことがございました。実際に、当時の浄土宗の『宗報』を見れば明らかです。一九四二年、三年、四年あたりになってくると、このような「愛国機明照号」の献納。全浄土宗徒との赤心を示せ」とか、非常におどろおどろしい文言で、「浄土宗を挙げて零戦を献納するから、皆さん、お金出しましょう。」ということを毎号、毎号、

『宗報』の方で呼びかけております。(図12)

愛國機「明照號」の献納

——浄土宗徒の赤心を示せ——

大東亞征戰大詔奉戴滿二周年を記念し、わが浄土宗戰國會が總本山並に大本山と協同の下に愛國機「明照號」献納運動の提唱は、航空決戦下機宜を得たる企圖として各方面に好反應を呼び、今や各教區にありては一齊に活潑なる運動を展開し、その率先願る良好なる報道に接しつゝあるは、決戦三年の新春にふさはしき宗門の光景にして隨喜感に堪えぬ。

喫緊切實、現段階の戦局を決するものが主として航空戦にあるは云ふ迄もなく、航空機の増産こそは當面最大の急務として國家の總力を集結されてゐる。而して飛行機！飛行機を一刻も早く前線へ！われ等はこの絶叫に心を澄ませ、耳を敏くして應へねばならぬ。われ等は海軍報道班員のものする次の如き報告を聞いては、坐して居られぬではないか。

炸裂する爆弾の破片に傷つて知死期の若し飛行兵曹は、絶え絶えなる息の下に、遙かに大元帥陛下に最後の訣別を告げまゐらせんと悶ゆるもの、如くである。血の糸を引く口のうちに、微かに「ア、ア」とはくは、「天皇陛下萬歳」のこゝろか。ツト駈け寄つて掻き抱けば命絶えなん最後の際、訣れを告げまゐらす叫び半ばは、彼れは必死に喘ぎのこした！「も」と飛行機が来るやうに輿論を起して下さいと。耳を聳する爆音と、砲聲と、修羅地獄と化したる絶海の戦場に、みるみる冷えゆく屍を抱いて私は血を吐き息ひに慟哭した。

われ等の愛國機「明照號」長くも明治大帝が宣下し給へる宗祖への御謚號を冠して、われ等宗祖門下余念佛宗徒は一齊に颯起しやう。われ等浄土宗徒の赤心をこの愛國機に灼熱化して示現しやうではないか。決戦第三新春のわれ等は此の聖なる運動から發足しやう。學宗總進軍だ、僧俗一體欣然として勇躍参加せよ。一人として落伍者があつてはならぬ。現下の戦局を凝視せよ、徒らに個の行懸りや感情に支配されてゐる時ではない。

(図12) 浄土宗宗法

ちなみに、愛國機「明照号」の明照は、明照大師のこと
で、法然上人のことです。法然上人が天皇から下賜された、
いわゆる大師号というものでありまして、つまり、特攻機
に法然号と名前をつけて、敵機に突っ込んでいったという
ことです。ちなみに、零戦の中には阿弥陀さんの像、ある
いは、日蓮宗であれば、お題目が置かれておりました。
また、大谷派が献納した軍艦は、一九四三年に、現在の
価値で二十五億円以上の資金を抛出して、海軍に渡されま
した。
金属供出というものがありません。(図13) これ、名前
だけ聞いたことあると思います。各家庭、工場、公園、こ
ういったところから金属をどんどん取って行って、武器を造
るということでありますが、お寺には金属はいっぱいあり
ます。各お寺は、金属保有状況、こういうリストを出せと
言われました。各宗門から末寺に伝達がありまして、リス
ト化して、それをだすということなんです。
これはまさに、お寺の金属供出の様子の写真です。(図
14) なかなか貴重です。梵鐘の後ろには和尚さんが写って
います。この写真を見ると、和尚さんの表情には、全く悲



消えた梵鐘

(図14) 金属供出の様子

(図13) 金属類保有状況調書



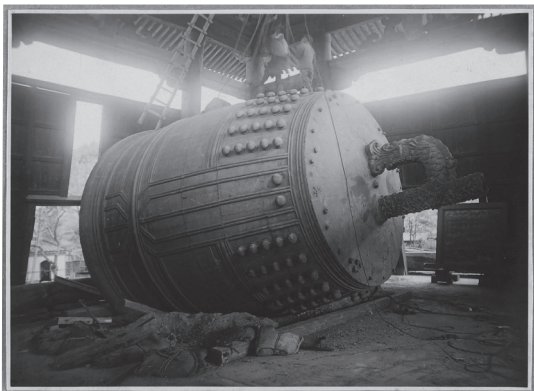
(図16) 四天王寺の梵鐘



(図15) 石原産業四日市場



(図18) コンクリートの梵鐘



(図17) 解体される四天王寺の梵鐘

壮感が漂っていません。誇らしい顔をしていますね、これ。

こちらの写真をご覧ください。(図15) これだけの数の梵鐘。これは全国と言うよりも、大阪の石原産業という会社の、四日市工場に集められた梵鐘です。東海地方、そして北陸地方は、この三重県の石原産業四日市工場に集められました。そして、溶かされて武器になりました。関西は、瀬戸内海の直島製錬所です。今の三菱マテリアル直島製錬所に運ばれて、溶かされました。当時、大阪の四天王寺には世界一の梵鐘がございました。(図16) 高さ八メートルの梵鐘です。これは、聖徳太子の御聖忌事業として造られたのですが、造られてすぐに梵鐘が抛出されました。そして、この写真のように、外されて、大きくて製錬所に運ばれませんから、その場でばらばらにして、トラックに積まれて、消えていきました。(図17)

慶長年間、戦国時代以前の梵鐘は、辛うじて残ったところもありますが、江戸時代以降の梵鐘は、ほとんどが無くなりました。皆さんのお寺でも、梵鐘があるお寺は少ないと思います。仮にあったとしても、その梵鐘は、慶長年間よりも以前の梵鐘か、あるいは戦後、造り直されたものです。梵鐘を金属供出に出さないということは、あまり考えられませんでした。

そして、梵鐘の代わりに、このようなコンクリートの梵鐘がぶら下



(図20) 草津市真教寺の梵鐘



(図19) 愛知県法雲寺の陶器製梵鐘

げられました。(図18) なぜぶら下げられたかという点、重い梵鐘を外してしまうと、バランスが崩れて、大風が吹いたら鐘楼堂が倒れてしまうからです。滋賀県には、まだこのようなコンクリートの梵鐘がぶら下げられているお寺が残っています。愛知県では陶器製の梵鐘が造られました。(図19) お金がないお寺はこのような、ドラム缶の回りをコンクリートで固めたようなものをぶら下げました。(図20)

また、運よく、製錬所が終戦間際に空襲に遭って、製錬ができなくなったため、溶かされずに残った梵鐘が、京都の幾つかのお寺に残っています。機会がありましたら、ぜひ、梵鐘をぐるっと一周見てみてください。そうすると、たまに穴が空いている梵鐘が見つかります。

(図21) これは、運よく金属供出から戻ってきた梵鐘です。穴が空いているのは、金属の含有量を調べるために、製錬所がドリルで穴を開けて調べたからです。だから、梵鐘に穴が空いているのです。

太平洋戦争で、お寺は四千六百九ヶ寺、全体の約六パーセントが被災、焼失しました。先ほど申し上げた、廃仏毀釈以来の惨事だったと言えると思います。当然、原爆を投下された二都市、そして東京や大阪などの地域では、極めて大きなダメージを受けました。増上寺も焼きました。増上寺は、昭和四十九年に、大殿が再建されましたが、それまではバラックでした。増上寺は、実は日光東照宮以上の豪華絢爛



穴の空いた鐘

（図21）穴の開いた梵鐘

な施設でありましたが、全て焼けました。徳川家の菩提寺でしたので、徳川家の霊廟がありました。これもすべて焼けてしまいました。当時の写真が、ごく一部残っております。（図22）これは、徳川秀忠の廟所であります。このような施設がありました。これが終戦後、焼け野原の中から、石製のものだけが集められて、現在は小さな徳川家の廟所になっております。

奈良の法隆寺や東大寺は、仏像の疎開を行いました。阿修羅像や無著・世親像など、そういったものは、実は隠されて、疎開していません。人間の疎開ではなく、仏像の疎開です。阿修羅像は、実は吉野の葛餅屋さんの土蔵の中に押し込められておりました。法隆寺は、実は戦時中一度解体されています。これは、解体されて五重塔が二重になっているところです。五重塔が解体されて、その木材が裏山などに隠されて、戦後、組み直されましたが、かなりのダメージを負いました。（図23）

東大寺も解体されましたが、これもほとんど知られていません。誰が解体をしたのかも知られていません。当時、男手は戦地に取られていましたので、奈良刑務所の囚人が、荒々しく、金剛力士像などの国宝を疎開させた。これによって、仏像などが大きく破損しました。その後の報告によると、「二体の仁王像のうち、阿形像は頭がとれ、吽



(図23) 法隆寺の解体疎開



(図22) 徳川秀忠の廟所

形象は背中に穴が空くといった傷みようで、また、四天王像も手が折れるなどの傷みが激しく、美術院の吉川政治さんによって修復が行われました」という記録がございます。

お寺には、砲弾が結構残っています。日清戦争、日露戦争の後に、戦利品整理委員会という委員会が立ち上がって、お寺や神社に砲弾などの戦利品が配られました。これもお寺に結構な数が残っています。こちらは、東京の大田区のお寺の写真です。(図24) このように、お墓のところに、巨大な砲弾が置かれております。砲弾をお寺に飾ってお祀りして、檀家さんを鼓舞していたわけです。

これは、広島にあります臨済宗佛通寺派大本山の佛通寺、境内地の写真です。(図25) 岩山には、今なお「尊皇」という巨大な字が穿たれております。「尊皇」の尊の字の中に、石工さんが入って雨宿りをしたという話があるほど大きなものです。これは、佛通寺に行つて精神鍛錬をした軍人が、大陸で戦つて戦死をしたため、それを弔うために彫られたものです。

京都の五山送り火は、灯火管制、空襲の標的になるので中止されました。ちなみに、五山送り火と申し上げましたが、戦前は七山ありました。もっと言うと、江戸時代は十山ありました。しかし、廃仏毀釈によって、十山が七山に減らされました。そして、戦争によって七山



【図25】 臨濟宗佛通寺派大本山佛通寺



（図24） 寺院の境内に残る砲弾

が五山になったのが、現在の京都の五山送り火というわけです。このことも、ほとんど誰も知りません。

そして、皆さんのお寺にも、このような天牌があるはずです。「天皇陛下宝祚無窮」と書かれています。「護国」と書かれた位牌、こういうものもあると思います。そして、「明治天皇尊儀」というような、明治天皇の御霊をお祀りする位牌があったりもします。あるいは、この右側にある位牌、こちらに書かれているのは戦時戒名というものです。ね。「殉忠院釋義正居士」と書いてありますが、これは殉職の「殉」、忠臣の「忠」、義理の「義」、こういったおどろおどろしい文字を、戦死者英霊のため

に使いなさい。そして、必ず院号居士をつけなさいという通達

が、当時の内務省から宗門に下りて、宗門から末寺に伝達されました。そして、英霊の弔いが行われてきます。

今、お葬式は規模が小さくなっています。その前、バブルのときまでは、お葬式は肥大化していました。実は、お葬式の肥大化の最初、スタート地点は、戦争です。戦争で、村ごと若者をお寺が送り出して、亡くなったときに盛大な弔いがあって、それが戦後も続いてきて、バブルのときまで維持されてきたわけです。それが、いよいよ小さくなってきた。だから、お葬式

文春新書
1198

仏教抹殺

なぜ明治維新は寺院を破壊したのか

鶴飼秀徳

隠された明治の暗部
廃仏毀釈



興福寺阿修羅像、五重塔も消滅の危機にあった！
鹿児島、松本、伊勢、東京、奈良、京都など現地徹底取材

文春新書
1365

仏教の大東亜戦争

鶴飼秀徳

なぜ仏教は
国民を「殺生」に
駆り立てたか
最大のタブー「戦争協力」の実態



頭部を残し、軍用資材として
回収された「上野大仏」

の問題というのは、実は戦争に原点があるわけです。このような奥津城もあります。英霊のお墓の先が尖っています。本来はこういうお墓を作る必要はありません。先祖代々のお墓があるんですから。けれど、これも作るように命じられました。神道式のお墓です。中に骨は入っていません。遺骨収集が進んでないからです。

戦後、国家神道は解体されます。GHQが入ってきて、GHQの指導の下に、戦後、日本の宗教の在り方が模索されます。対日政策を担当したのは、民間情報教育局宗教部長のウィリアム・バンスという人物です。この人物は、このようなことを言っています。「たとえ日本人が仏教その他の精神から迷い出たとしても、それは仏教やその他の宗教側に罪があったのではなく、日本人の側に罪があったと考える必要はない」。これによって、日本の戦後の宗教、神道、そして仏教は、ある意味、崩壊を免れたのかもしれませんが、GHQは農地解放ということに乗り出してきます。

寺領が持つ農地に関しては、取り上げということに、小作人に対して払い下げるといふようなことになりました。実はこの小作人は、檀家さんが多かった。つまりお寺の農地が、檀家さんに払い下げられたということです。これによって経済力を削がれたお寺が、結果的に、葬式仏教に舵を切らざるを得なくなっていくます。

ですので、現在のお坊さんに対する批判、坊主丸儲けだの、納骨がどうのこうのというようなことは、実は敗戦後の農地解放によって、経済力を削がれたお寺が、お金を稼ぐ為の苦肉の策として、大規模霊園分譲などに舵を切らざるを得なくなったという側面があるわけです。現在のお寺の問題というのは、戦争、もしくは廃仏毀釈ぐらゐまで遡らないと分からないのです。

では、お時間になりましたので、終わりにさせていただきます。かなり駆け足でお話させていただきましたので、より詳しく内容を知りたい方がいらっしゃいましたら、私の著作を二冊、『仏教抹殺』と『仏教の大東亜戦争』という本を買って、そちらの方で復習していただければと思います。ご清聴ありがとうございました。

菅野 鶴飼先生、どうもありがとうございました。かいつまんでのお話ではございましたが、大変興味のそそるお話でございました。今お話にもございました通り、鶴飼先生の二冊の本に、より詳しい内容が書いてあると思いますので、ご関心のある方は、ぜひ書籍の方を購入していただければと思います。

続きまして、赤堀所長より「人はなぜ戦争をするのか」というテーマでのご講演をいただきます。赤堀所長、よろしくお願いたします。

人はなぜ戦争をするのか

赤堀 人は皆、平和を願っているのに、なぜ戦争をするのでしょうか。本当に、人は平和を願っているのでしょうか。それとも、平和を願いながら、戦争をするのでしょうか。有史以来、人類は戦争を繰り返してきています。大勢の人が、この疑問に答えようとしてきました。今回は、こうした先人の論述を辿りながら、戦争を分析することから、平和への道筋をたどってみたいと思っています。

はじめに、戦争は自然の営みであるという、アテネ人の戦争論を見てまいります。最古の戦争史である、トゥキユデイスの『戦史』には、アテネ人のテーゼとして知られる概念が二点あります。一点は、絶えず自らの力を増大させ、行使することを求めるのが、人間や国家の本性なのだとしたこと。もう一点は、侵略を行ったとしても、それは人の本性に従って振る舞ったにすぎないのだから、その振る舞いを非難されるには当たらない。そんな筋合いはないという考えです。ここに挙げられている点は、戦争は人間の本性であり、国家の本性は弱肉強食にある。それは自然の掟であって、何ら咎められるものではない。戦争は、自然の営みであると認識されています。これは、人類で初めて戦争に触れた人々の考えであるということ、心に留めていただきたいと思っています。

この考えを、ジークムント・フロイト、それから、ロジェ・カイヨワという二人の近代の学者の論説から、深掘りしてみようと思います。心理学者のフロイトは、性のリビドーが人を動かし、人間の深層には得体の知れない魔物が潜んでいるのだと考察して、それまで、キリスト教の「神の子としての人間」という理解に一石を投じました。フロイトは、戦争も人間の本性なのだと考え、その上で、文化による戦争の抑止を語っています。その弟子であるユングは、すべての人間には共通する神の如き概念があるとして、人間の無限の可能性を示唆しています。フロイトとユングは、二人して、日蓮聖人の言うところの人界の天界・地獄界の具足、十界の互具ということ、心理学によって検

証しているのではないかと感じます。

次に、『イメージと人間』や『戦争論』などを著わした、フランスの社会学、哲学の研究者、ロジェ・カイヨワについてお話しします。ロジェ・カイヨワは、ジョルジュ・バタイユという哲学者の著わした『エロスの涙』という本に影響を受けています。『エロスの涙』では、フランスのラスコー洞窟にある絵画について言及しています。ラスコーの洞窟壁画は、世界最古の壁画であり、世界最古の宗教画とも言われ、パブロ・ピカソも絶賛した芸術作品です。この壁画には、はらわたを出して死んでいる野牛が描かれており、その脇には横たわっている男性が描かれています。この男性の生死は不明です。この壁画の異様なところは、野牛の脇に横たわる男性の男性器が屹立しているところにあります。そして、その前には、T字型の木に鳥が止まっている。これは、日本の鳥居の原型と興味なのではないかと思えます。中国の雲南省の方にも同じものがありますが、それと同じものが世界最古の宗教画にも描かれています。これらは共に、人知の及ばないもの、畏怖すべき存在を示す印であると考えられています。この壁画に描かれた内容から、ロジェ・カイヨワは、生と死というのは共通点を持っていると考えました。ジョルジュ・バタイユは、著作の中で、「牛を殺し、はらわたが出ている。そして、自らもその牛の角で刺されて死んでいるかもし



ラスコーの壁画「井戸の場面」（赤堀模写）

れない。その男性は、ある種の快楽を得て、エクスタシーに至っているのだ」ということを述べています。

私は、そのことへの関心から、ロジェ・カイヨワの『戦争論』を読むようになりました。ロジェ・カイヨワは、人間の心理から、祭りと戦争の概念は共通するものがある。そういう普通の戦争論とは異なった視点から、戦争を捉えています。戦争と文明は切っても切れない関係にあるとし、国は神に取って代わり、聖戦という戦争は聖なる儀式となり、忘我、エクスタシーを与え、また、生産性のない、吐き出すことの快感、生命すらも捨ててよいと感じる喜びを戦争は与えてくれるという見解を示しています。

この三人の論述をまとめますと、フロイトとカイヨワは、共に人間の本質的な部分には、闘争への志向があると指摘しています。ギリシャ・ローマ以来、人間と人間、人間と動物との格闘を見て歓喜することは、政治の一環として組み込まれてきました。また、アメリカ映画を見れば、戦争の場面あるいは格闘の場面が、必ずと言っていいほど組み込まれています。今年はオリンピック、現在もパラリンピックが開かれています。オリンピックもスポーツ化しているとはいえ、人間同士の勝敗を決する、戦う場であって、人々はそれを見て興奮を覚えているところがあります。こうしたことから、人間は闘争に関して本能的に受け入れている部分がある。このことを認識せざるを得ない必然性を感じます。

次に、戦争観についてお話しします。戦争観には、大きく分けて二つあります。一つは、「無差別戦争観」です。戦争は、領土、食糧、エネルギーの争奪による外的因子に起因する戦争観です。古代アテナイの歴史家であるトゥキユデイデスは、大国と新興国の間では、必ずと言っていいほど、これを原因として戦争が起こっていることを指摘しています。

二つ目は、「正戦論」です。「セイセン」には、「正しい戦い」という場合と、聖戦、「聖なる戦い」という二通りがあります。ここでは、正しい方の正戦論ということをし、初めにお話しします。この正戦論と称する戦争観が、二つ目



イスラエルに撃ち込まれたロケット弾の残骸

の戦争観です。ロシアのように、過去の帝政ロシア時代こそが、本来のロシアであるという大口ロシア論を掲げて、「ウクライナはロシアの領土の一部であり、これを奪還するための戦いで、侵略をしているのではない。だからこの戦いは正しい」と主張する。「仮想の正戦論」によって起こる戦争を、「仮想戦争（コズミック・ウォー）」と呼んでいます。

具体的な仮想戦争の例として、中東戦争を取り上げてみます。これは、ハマスがイスラエルを奇襲しているときの写真です。ハマスとイスラエルの衝突の理由は、ガザ地区の人々からすれば、ハマスの突然の襲撃は、今までイスラエルがしてきたことに比べれば何でもない。七十万人の同胞が土地を追われているのだ。今、戦わなければ、我々は生きてはいけなさと訴えています。一方で、ガザ侵攻は、イスラエルの人々のうち、約四十パーセントの人が当然であると答え、ガザ地区も本来はイスラエルの土地であったと主張しています。イスラム教の武装組織ハマスは、イスラム国家の樹立を、イスラエルはシオニズムによるイスラエル国家の建設を目的として、共に聖戦と位置付けています。元を辿れば、『旧約聖書』以来の恨みの連鎖と見られる仮想の戦争なのです。

次に、ロシアによるウクライナ侵攻を取り上げてみます。ロシアは、過去の歴史的領有を盾に、ウクライナを武力によって支配しようと、侵略を開始しました。戦略的には、ウクライナのEUへの加盟を阻止したい思惑があることは周知されています。しかし、プーチンと彼に同調する国民にとっては、「大口ロシア」という「コスモス」の概念の中での出来事なの

です。「コスモス」とは、戦争を説明する上で、とても重要な概念の一つで、「秩序立った意味体系」のことを言います。そして、このコスモスの概念によって、ロシア国民は、戦争を正当化しています。要するに、ロシアは正当な根拠や理由はなく、仮想の正戦論によって構築された「大国ロシア」という大義（コスモス）を掲げて戦っているのです。このようなコスモスの概念によって起こる戦争を、ここでは「コスモス戦争」と呼んでいます。これに対して、ウクライナは、独立国家としての自由と、自国の領土を守るために抗戦しているのです。

これは、アルカイダのハイジャックによって、ニューヨークの世界貿易センター、ツインタワービルに旅客機が激突し、爆発炎上している場面です。いわゆる九・一一といわれる事件です。この直後に、ブッシュ大統領が声明を出しています。確か、小学校に訪問されていて、そのときに、第一報が入ったときの発言だったと思います。ブッシュ大統領は演説で、聖戦という意味の「クルセイド」という言葉を用いています。これによって、全キリスト教圏にアイデンティティ（帰属意識）を求めました。「クルセイド」は、大文字の「C」で書かれると、十字軍と訳されます。この言葉は後日、訂正されるのですが、これは明らかに、キリスト教のイスラム教に対する聖戦の開始を暗示していたと言われています。一方、アルカイダの指導者であるウサマ・ビン・ラディンは、これに対して、次のように反応しています。「これは、アルカイダとアメリカの間の戦いではなく、地球規模の十字軍



テロ攻撃を受けるワールドトレードセンター（ツインタワービル）

に対するムスリムの戦いなのだ」。ここに、共に聖戦の旗を掲げて、交戦の扉が開かれたのです。

このビン・ラディンの発言について、宗教学者のレーザー・アスランは、次のように語っています。「九・一一の当事者たちにとった一つの大きな抱負があったとすれば、それは、ビン・ラディンの言葉を借りれば、キリスト教十字軍に対峙するムスリム世界を統一し、いかなる犠牲を払っても、彼らの仮想戦争の永続化を図ることだった。なぜなら、それ以外に、彼らのアイデンティティを維持できる手段はないからである」。この戦争は、もはや現実に領土を取るとか、そういうことでは無くなっているのだと語っています。

こうした戦争理解は、正戦論（ジャスト・ウォー・セオリー）と呼ばれ、宗教戦争に限らず、社会主義あるいは民主主義等、政治理念の正義を掲げての戦争も、同様に正戦と見做されています。民主主義や社会主義といった政治的理念が関わる戦争は、正しい方の正戦が使われ、宗教が関わる場合には、聖なる方の聖戦が使われています。

このように、戦争を世界観や歴史観、宗教観などによって「秩序立った意味体系」を構築し、「正戦」、あるいは「聖戦」と位置付けて行う戦争を、宗教社会学者のマーク・ユルゲンスマイヤーは、「コスモス戦争」と名付けています。『『文明の衝突』の著者である、国際政治学者のサミュエル・ハンチントン』は、「宗教の相違は人間の間に存在する最も深刻な相違である」と考察しています。ハンチントンは、異なる文明の間にある断層線（フォルト・ライン）上で勃発する戦争を、フォルト・ライン戦争と呼んで、その多くは宗教に起因すると指摘しています。異なった思想や宗教は、それぞれが人生や世界に意味付けをすることによって、人々に「秩序立った意味体系」、つまり「コスモス」を提供しています。そして、これが戦争の引き金になる場合もあるのです。

ほとんどの宗教は、「秩序立った意味体系」、すなわち「コスモス」を持っていますが、これらは時として「善と悪」や「真理と虚偽」、「秩序と無秩序」というような絶対的な二項対立を構築することがあります。そして、このような「自らの聖なる意味の体系によって戦われる戦争」を、「コスモス戦争」と呼称しているのです。

次に、こちらをご覧ください。戦争の構造を図にまとめてみました。この図について、少し説明をさせていただきます。図の左から二番目にある「外的因子」というのは、これは「無差別戦争観」のことです。領土や経済、食糧、エネルギーの争奪などが戦争のファクターとなり得ることを表わしています。その下の「内的因子」というのは、先ほど申し上げました、「正戦観」のことです。正戦論、あるいは聖戦論などが戦争のファクターとなり得ることを表わしています。そして、戦争というのは、実は、この二つ因子が絡まり合うことで、「コスモス」という戦争を遂行する一つの体系が作り上げられてしまうのです。そして、これによって、開戦に至ってしまうというのが、私が今、述べているところなんです。そして、この「コスモス戦争」を形作る内的因子として、自らの主義を正しいと主張する正戦論、それから、宗教を中心とした聖戦論、この二つの要素から「仮想戦争」という形に、戦争が組み立てられていきます。このことを理解していただければと思います。

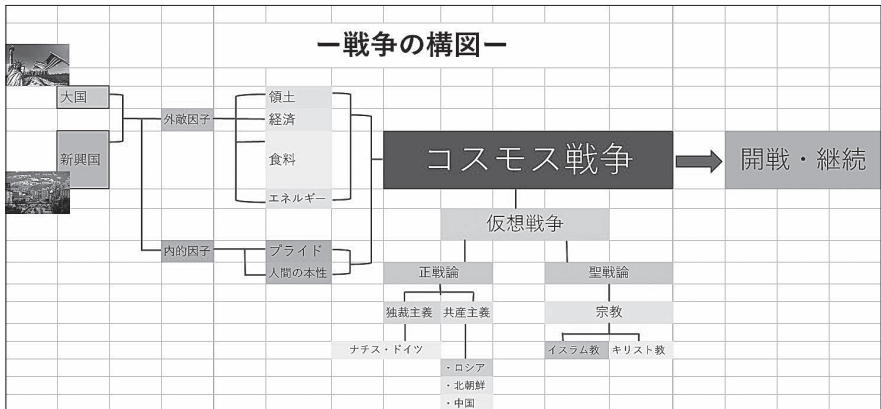
「コスモス戦争」には、三つの特徴があります。

一、争いが、当事者国家の基本的なアイデンティティと尊厳を守るためのものとみなされること。

—争いが当事者の命ばかりではなく、宗教文化全体を守るためのものと解されるならば、宗教的意味合いを伴う文化戦争とみなされます

二、争いに負けることなど考えられないこと。

一戦争の構図一



―争いに負けることが考えられない、その争いは人間の歴史を超えた次元で起きている、と解釈されます。

三、争いが行き詰まり、現時点あるいは現実問題として、勝利できないこと

―争いが人間の次元では絶望的なものと見做されれば、それは勝利の可能性を神の手に委ねる宗教の次元で再考されます。

星川啓慈先生、石川明人先生の所見を参考に、まとめてみました。これに私見を加えれば、戦争の原因となる「コスモス」は思想や主義、民族意識などによっても形成されるもので、宗教のみに限定されるものではない。確かに、宗教は戦争の原因となり得る要素を持つコスモスを形成するし、一般的に、宗教が戦争の原因になるという説もあります。しかし、宗教はそうした要素を持つてはいますが、必ずしもその要素だけが原因で戦争が行われ、継続されていくわけではないのです。

次に、コスモス戦争の例を二つほど挙げてみたいと思います。一つ目は、ナチス・ドイツのコスモス形成についてです。ナチス・ドイツの目的は、全てのドイツ人が、ナチズムの世界観に基づいた共同体を営むことです。ナチス・ドイツの価値観は、優生学的に、アーリアンであるゲルマン民族は優れていると考えます。ユダヤ人を寄生虫の「寄生」に、「害」のある「獣」と書いて、「寄生害獣」であり、劣っているから、根絶すべき存在であると位置付けています。この優劣により、ナチス・ドイツの戦争は正戦であることを宣伝し、コスモスを形成したということになります。

もう一つは、日本のコスモス形成についてです。第二次大戦中、「日本人は万世一系の純血と、三千年の歴史を持つ優秀な民族である。日本はアジアを欧米から解放し、天皇を中心とした、八紘はっこういちゅう一字の理想の世界を築く崇高な目的がある」というコスモスを持って、戦争に臨んでいます。実際にはどれだけの人々がこのことを理解していたかは別として、こうした「秩序立った意味体系」に入ってしまうと、国家全体がその方向に動いてしまい、国民は反対する

よりも、その中で歓喜や興奮を覚えるということが、このコスモスという概念のパワーであり、恐ろしいところでもあります。

これまでの論考を、ここで一度まとめてみます。

一、戦争は人間の本質に根ざすもので、簡単になくなるものではなく、この事実を前提として平和への道筋を考えなければならぬ。

二、宗教は秩序立った意味の体系・コスモスをもたらし、そこに参加することによりアイデンティティを得られることから、戦争の要因となる可能性を示しています。ナチス・ドイツ、共産主義国などは、独自のコスモスを創出し、同時にアイデンティティも与えています。このことから、宗教は戦争の要因ともなるが、他の思想・主義によるコスモスが要因ともなりえる。

三、宗教・思想などによってコスモスが形成される中に、他の宗教や民族を殺傷することの組み込みは、除かれなくてはならない。

次に、これまでの戦争の本質論を踏まえて、「平和への道筋」について、お話しさせていただきます。世界で最も有名な書籍の一つである『戦争論』を著した軍事学者のカール・フォン・クラウゼヴィッツは、それまでの戦略を主とした戦争論とは異なり、「戦争とは何か」という本質論を展開しています。そして、「戦争とは他の手段を以てする政治の継続に他ならない」と定義しています。また、「戦争は単に一つの行動であるのみならず、実にまた一つの政治的手段でもあり、政治的交渉の継続であり、……政治は目的を決め、戦争はこれを達成する」と細説しています。

哲学者のイマヌエル・カントも、晩年に戦争・平和論について触れています。カントの有名な著作に『純粹理性批判』があります。この本は、皆さんの中にも、学生の頃に読まれた方がいるかもしれません。他にもカントは多数の有名な書籍を著わしていますが、カントが晩年に著わした『永久平和のために』の中で、戦争と平和について述べて

います。この戦争論は非常に平明に書かれています。カントは、戦争をすることが人間の本性であると捉えていて、人間にとって戦争は自然状態であり、平和は新たに創出すべきものだとして述べているのです。その上で、「諸国による平和のための連合」を構想しています。つまり、カントは、人間の本性が邪悪だからこそ、我が内なる道徳的法則に基づいて、自由な国家の連合による平和の実現を提言し、何人も敵意のない平和、永遠の平和を提唱しているのです。実は、カントの「諸国による平和のための連合」という構想は、国際連盟、そして現在の国際連合の原型となった思想だと言われています。また、カントは、「一時的平和」と「恒久平和」という二つに分けて、戦争が停止した状態を「一時的な平和」、そして、人々が平和を望み、平和の中にいることを喜びとするようになった状態を、「恒久平和」と呼んでいます。

次に、アルベルト・アインシュタインの戦争論を取り上げます。アインシュタインは、有名な相対性理論を発見した理論物理学者です。特に、特殊相対性理論から導き出した、「 $E=mc^2$ 」という世界で一番有名な公式は、原子に莫大なエネルギーが秘められていることを理論化しました。そして、この特殊相対性理論、「 $E=mc^2$ 」という公式を基に、原子爆弾が開発されたのです。アインシュタインは戦争と平和について、フロイトと書簡を交わしています。これは、国際連盟の国際的協力機関からの提案によるものです。その書簡の中で、ナチス・ドイツの一人の狂気が戦争に巻き込むことや、原爆の発明により一瞬に数十万の人が殺傷されることを前提に、人間の争いを好む本性の抑止は、独自の軍事力を有する国連だけが可能であると提言しています。

この三人の説をまとめると、クラウゼヴィッツは、戦争は政治の手段であるとし、カントは、諸国による平和のための連合を構想し、それが国際連盟の設立に大きな影響を与えたことになり、アインシュタインは、新しい形での国連を構想して、条件付きであるが、国連を平和をもたらす理想の機関と考えたのです。

次に、釈尊は戦争をどのように捉えているのかについて触れてまいります。釈尊の戦争に関する直接の言説は多く

ありません。その中で、主に二つの話について見ていこうと思います。まず、釈迦国とコーサラ国の水争いの話です。日照りが長く続く中、コーサラ国では水が不足し、ローヒニー川の水利権を持つ釈迦国に水を分けてくれるように頼みました。ところが、釈迦国はこれを拒否します。コーサラ国はこれを恨み、戦の準備を進め、ローヒニー川を挟んで戦う寸前に至ります。そのときに、釈尊はローヒニー川に至り、そこに出向かれて、次のように話をされました。「ローヒニー川の流れる水のために、なぜあなたたちは戦って、価値の量り知れない高貴な王族と、国を滅ぼそうと望むのですか。無意味な戦闘と無駄な殺し合いでは、何の喜びも見つからないでしょう。限らない欲望は人を苦しめ、争いに至るものです。心を静め、安穩な国を作ることが何よりも大切なのです」。釈尊はこれようにお説きになり、諄々と仏法の教えを説かれたと伝えられています。

次に、釈迦族の滅亡に関わる話を見ていきます。お釈迦様の祖国である釈迦国は、小さな種族として、コーサラ国に従属していました。ある時、コーサラ国の波斯匿王（はしくお）（プラセーナジツ）は、釈迦族に「釈迦族の娘を妃に迎えた」と要請しました。しかし、釈迦族は、自尊心が高く、血統を重んじる一族であったため、その血統の誇りの高さから、この要請を拒みます。釈迦族は一計を案じ、大臣の摩訶摩男（マハーナーマン）が下女との間に生ませた娘を着飾って、波斯匿王のもとに嫁入りをさせました。摩訶摩男は、「波斯匿王は暴悪の王であるから、もし怒りを買えば、我が国は滅ぼされてしまうだろう」と思い、自らの娘を選んで、嫁入りをさせたわけです。

波斯匿王に嫁ぎ、妃となった娘は子宝に恵まれて、毘瑠璃太子（びるりた）（ヴィルダカ）を生みます。毘瑠璃太子が八歳になった頃、釈迦族のもとに弓矢を習いに行っていました。その頃、釈迦族のお城では、新しい公会堂が完成して、神聖な獅子座が据えられました。毘瑠璃王はそこに、戯れで座ってしまったのです。それを見た釈迦族の人々が、毘瑠璃に向かつて、「おまえは下女が生んだ子だ。それなのに、神々や王族の座る獅子座を汚した」と罵ります。

後に、毘瑠璃太子は、側近のバラモンに唆されて、父である波斯匿王の王位を奪います。王権が代わったために、

波斯匿王と釈迦国との間に築かれた信頼関係は崩れ、新しく王位に就いた毘瑠璃王は、釈迦国滅亡を企てて、釈迦族を滅ぼそうと進軍を開始します。これを知った釈尊は、一本の枯れ木の下に座って、これを待たれていました。進軍してきた毘瑠璃王は、釈尊を見つけると、「世尊よ、他に青々と茂ったニグローダ樹の木陰があるのに、なぜ枯れ木の下でお座りになっているのですか」と問いかけました。釈尊は、「王よ、親族の陰は涼しいものである。お互いに血がつながった者同士、それは大きな実りをもたらし、そうして人々に安らぎを与えるものである」と語られたのです。毘瑠璃王は思いを止まらせて、一度は軍隊を舍衛城に戻しました。しかし、毘瑠璃王の釈迦族に対する恨みは、どうしても消えることはなく、釈迦国を滅ぼそうと、再び進軍を開始しました。進軍は二度、あるいは、三度、四度という説もあります。この毘瑠璃王の釈迦族に対する恨みが、遂に釈迦族を滅亡させたのです。

コーサラ国がカピラ城を攻めてきた時、釈迦族は、五戒の不殺生戒を遵守して、威嚇するだけで、武器を用いることなく、コーサラ国の人を殺傷しなかつたと伝えられています。実は、釈迦族は、非常に優れた武器を持っており、軍隊もよく訓練されていたといわれています。ところが、武器を用いることもなく、コーサラ国に降伏したわけです。釈尊は、コーサラ国の軍隊の進路に赴き、争いの無意味さを説きましたが、終に、コーサラ国はカピラ城を襲撃し、釈迦族は滅びてしまいました。

ここで、いくつか、私見を付け加えさせていただきます。釈尊は、「カピラ城の城門を閉じよ」と助言されたとも伝えられています。これは「国の内政と防衛力を固めれば、外敵から国を守れる」とした教えとも符合するかと思われ。釈尊は、防衛力を高めることで、戦争を回避できると考えられたのではないかと、推察します。また、釈迦族が血統を誇ることなく、他の小国との連合軍を組織できていれば、大国であるコーサラ国の襲撃を防衛できたのではないかと考えます。現在から見れば、そのようにも考えられるのではないのでしょうか。

次に、日蓮聖人の戦争に対する考えを見てまいります。聖人は、『大般涅槃経』を引用されて、釈尊が過去世にお

いて、仏法を守るため、武器を取って戦ったことが語られています。「正法を守るものは刀剣器仗を手に取り、法師を護衛せよ。それこそが大乗の菩薩である。」と説き示されています。また、同じく『涅槃経』に、「刀杖を持つと言えども命を断ずべからず」と述べられています。この文は、『立正安国論』に引用され、仏教徒の戦いに対応する基本姿勢であり、釈尊と、日蓮聖人に共通して見られる考えでもあります。

次に、日蓮聖人の戦争に関わる言動を見てまいります。日蓮聖人は在世中、蒙古襲来に際して、蒙古の使者を殺したことを批判し、適切な外交を促されています。また、幕府に国防力を十分に備えることを進言されています。このことから、適切な外交と国防力を備えることによって、国を防衛すべきであるとする思想と姿勢が見られると思います。

日蓮聖人の政治に関する著作、行動から、戦争抑止に関係すると思われる所見を挙げてみます。一つ目は、「公場対決」です。公場対決とは、公の場で論議することです。これを今の状況で考えますと、国の大小、民族、宗教に関わらず、自由・平等に議論することです。これは、宗教間対話、あるいは、星川啓慈先生や石川明人先生、斎藤謙次先生などが提唱している「公共哲学」という概念にも通じると考えます。公共哲学というのは、国の大小や、財力や国力、兵力によることなく、全ての参加者が同じ立場で意見を述べ、議論することができる機会を設定しようとする取り組みであります。現在、この概念を以て、宗教間対話を行うことが提唱されてきています。

二つ目は、「諫暁」です。諫暁とは、国政の問題点を指摘することです。現代に合わせれば、為政者と、主権のある国民の双方に仏教から見た国政の問題点を明らかにすることでであると考えます。

三つ目は、「施を止む」ことです。これは、誤った宗教への経済援助を停止することです。日蓮聖人は、念仏を謗法とされて、その謗法を止めるためには、施を止むべきでありました。現在で言うところの、問題のある国家に対する、国連主導による経済封鎖に類似しています。

そして、四つ目は、「国亡び人滅せば、仏を誰か崇むべき、法を誰か信ずべきや。」という『安国論』のお言葉です。これは、「国が無くなってしまうては、仏教も貰はれることは無くなってしまうことから、仏教もまた国の安穩を願うべきであり、我々もまた戦争を止め、平和の実現に励まなければならぬ」という意味の教えです。

また、二つ目で触れた、仏法の内容について詳説するための、仏教の原則とも見ることができ、三つの要素について触れておきたいと思います。一つには、「運命を支配する絶対神の存在を信じない」。これは、国家の運命を神には任せない。あるいは、神々の代理戦争という仮想の聖戦、コスモスの形成ということを許さないということにも繋がります。二つ目は、「生まれや財力によって人を評価してはならない。その人の行いのみによって評価すべきである」。これは、民族や肌の色、国や文化の違いによって、差別をしてはならないということになります。これは、釈迦国の滅亡にも関係することだと思えます。また、仏教は人権論の抛り所ともされていて、特に、この法（ダルマ）の概念は、インドの初代法務大臣を務めたビームラーオ・アンベードカルにも、多大な影響を与えています。三つ目は、「自らの行いは自らその結果を受ける」。自業自得という考えです。全ては人それぞれの責任であり、宿業や神仏の責任ではないということ、を、仏教の、我々一人ひとりが心に銘ずべきことではないかと思えます。

最後に、これまでの論考をまとめてみます。闘争は人間の本性であり、それを基に、人々を戦争に駆り立てるような「コスモス」の概念が形成され、戦争が始まります。過去に、仏教教団が戦争に加担したのは、このコスモス概念の形成に寄与するか、あるいは、コスモス概念に利用されるか、利用したからに他なりません。仏教教団は八紘一宇に寄与し、大政翼賛を利用されたということです。

仏教は、人間の本性に、地獄・餓鬼・畜生の三悪道とともに、闘争の世界である修羅界を備えていることを教えています。闘争を好む本性があることを知悉するからこそ、同時に、相反する慈悲の心が発現されるのが、釈尊と日蓮聖人の仏教であると考えます。この実現には、迫害を加える人であっても軽んぜず敬うという常不軽菩薩の精神と態

度が必要とされるのです。以上のことを図示したものが、この「平和への構図」になります。

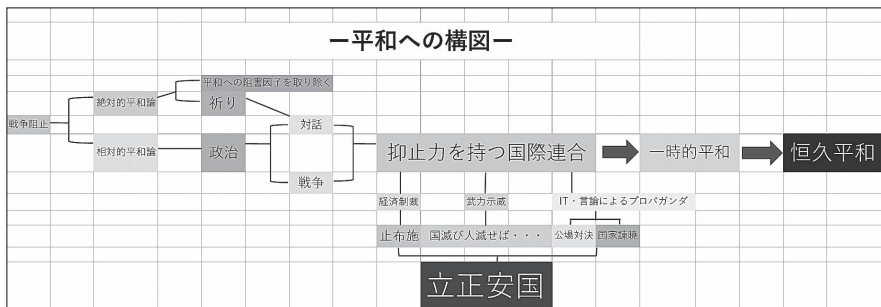
私たち一人ひとりが戦争を引き起こし、また、私たち一人ひとりが平和を築くのだということ、心に銘じていただきたいと思います。以上で、私のお話を閉じさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

菅野 赤堀所長、ありがとうございます。以上で、三先生それぞれの発表が終わりました。先生方、どうもありがとうございました。

ここで昼食休憩に移り、その後パネルディスカッションという形で、皆様の質問を受け付けたいと思います。三先生それぞれに対するご質問でも結構ですし、全体に関する質問でも結構でございます。皆様が常々持つておられる疑問でも結構でございますので、それをぶつけていただければと思います。よろしくお願い致します。

パネルディスカッション

菅野 今回のテーマが、「仏教から戦争と平和を考える」ということで、その中でサブテーマともいえるのが、「宗教は戦争の原因となり得るのか」。先ほど、赤堀所長から、戦争の要因の一つとなり得るという話も伺いました。ただ、所長の話にも出てきた、星川先生や石川先生といった哲学系、宗教社会学系の先生方の中では、宗教は戦



争が起こった上での背景とか、あるいは、戦争を進めるための一つの要因とはなるかもしれないけれども、厳密な意味で原因とはなり得ないのではないかと考えが、今まで論じられてきているところのポイントみたいですね。

池上先生がおっしゃるように、領土拡張と統治権の確保というのが戦争の大きな原因、要因だということは、確かにそのとおりだと思います。また、戦前の日本仏教の各宗派の動きを見た中でも、協力体制というべきか、明らかに戦争を推し進める力ともなっていると思えてしまうところがあります。そこでまず、宗教が戦争の原因、あるいは要因となり得るか否かという点について、改めて三先生からご意見を伺いたいと思います。池上先生にお聞きしたいのですが、宗教と戦争との関係について、もし個人的な考えでも結構ですので、少しだけいただけませんか。

池上 宗教との関係ですか。

菅野 ええ、例えばパレスチナ問題など。

池上 これは凄く難しい問題なので、私一人があるとかないとか言えないのですが、人々が信仰している宗教的聖地であるような地域で、一部の過激派が色々と紛争を起こす、そういう原因はあるかもしれないと思います。しかし、経済だとか、自分の統治権を盤石なものにしたいとか、そういうような欲求がかなり影響しているのではないかと思います。

菅野 鵜飼先生、お願いいたします。

鵜飼　そうですね。権力と宗教というのは、お互い影響しあっているということなのだろうと思います。言い方を換えれば、利用しあう。先の大戦の構造というのは、基本的には宗教も国家を利用したし、国家も宗教を利用したと思うんですね。江戸時代には、寺請制度ですべての村にお寺を作った。国内の中では飽和状態になったので、結局、明治新政府の施策によって、北海道の開拓にも一緒に乗り出したし、大陸布教にも乗り出した。戦争の発端となり得るかどうかというのは、これは宗教によっても異なると思うのですが、仏教はなかなか発端にはなりにくい宗教だとは思いますが。ただ、その後、権力にうまく利用されていく。それに乗じて、仏教も政治を利用していくと、こういう構造は、実は今でも変わっていないという感じはいたします。

菅野　赤堀所長、お願いいたします。

赤堀　これは、図の方で見ただくと分かるんですが、戦争の因子、戦争を構成する原因になるものとして、外的因子と内的因子と、両方あるということです。内的因子の中に、人間の本性ですとか、それから国のプライドとか、これを形成する一つとして、宗教は大きな磁石のような、ものを引き付けていく魅力であると同時に力があるということだと思います。カントはこのことを適切に表現していて、邪悪なものがあるから正義を求めるといって、仏教で言うところの「煩惱即菩提」に近い考えを持っているんですね。

その意味で考えると、宗教そのものは、善にも悪にもなる。戦争も、今日の池上先生の話ではないのですけれども、物事に対してすべてを悪と決めつけるわけにはいかななくて、善の面も悪の面もあるというふうに見なければいけないというのが私の考えです。その意味では、宗教は戦争を起こす要因の一つとなり得る。しかも同時に、戦争を阻止し、抑止する要因ともなり得ると理解しているのが、今の私の考えです。

菅野 三先生から宗教と戦争との関係についてのお話をうかがいました。現象としては宗教が過去においてどのような関わりあいを持って来たかということは明らかですので、それを踏まえて、今の三先生のご意見ということであるかと思えます。さて、皆様からいただいた質問が大変多いものですから、一つ一つ先生方に投げかけていきたいと思えますので、よろしくお願いいたします。

まず、鵜飼先生にお聞きします。「戦後における仏教諸宗派における戦争協力の反省の動きを知りたい。戦後の、どのような行動が現代の各宗派の取り組みにつながっているのか、整理していただけると勉強になります。さらに現代の宗派の性格・特徴に作用しているのでしょうか、戦前の反省が戦後の宗派内の行動を形成する要因となっているのか、あるいは戦前の影響がまだ少しその宗派の内部に残っていると云えるのでしょうか。」

鵜飼 このようなシンポジウムが、まさにその一環だと思えますが、仏教教団が初めて戦争責任を明らかにしたのは、一九八〇年代以降ですね、浄土真宗が初めて戦争責任を認めた。その後、終戦五十周年のタイミングで、浄土宗等々の教団も戦争責任を認めて謝罪をするということを、宗務総長名でやっております。ただ、それで十分かというのと、全くそんなことはありません。毎年終戦の年に、各宗派が「こういうことがあったんだ」と表明することには至っていない、一過性で終わったというのが私の感想です。

ちなみに、参考までに、大戦中のお坊さんはどうしたのかというと、九十九パーセントのお坊さんは戦争賛美をしたと、私は思っています。宗門の、これは当時の『宗報』を見るとよく分かるのですが、反戦僧侶は基本的に共產主義と見做されて僧籍剥奪の処分を受けています。浄土宗も何人もいます。日蓮宗も、恐らくそうだと思います。この名誉回復が、ほとんど今なされておりません。ちなみに、真宗大谷派は、一九九六年四月一日に、「住職差免さめん並びに擯斥ひんせき処分の取消しについて」ということで、一応処分の取り消しを公に決めておりますし、臨濟宗も、妙心寺派も、

平成八年に擯斥、いわゆる僧籍剥奪の取り消しが行われて、復会および復権が認められて名誉回復がなされました。遅きに失したという感があります。「戦後七十四年が過ぎ、次第に戦争の悲惨さが忘れられ、国際紛争を武力によって解決しようという風潮が高まる中、宗門の社会的責任について改めて深く反省し、先の大戦で宗門が戦争に協力してきた事実を常に思い起こし、二度と同じ轍を踏まないよう、非戦平和の決意を新たにせねばなりません」と、臨済宗妙心寺派門宗長名で発表しておりますが、このような宗派はいくつかありません。

浄土宗では、ようやく、『浄土宗戦時資料に関する報告書』というものを送ってきました。二年ぐらい前に全寺院に、おたくのお寺で戦時資料残っていませんかという募集をかけまして、集めたものをようやく取りまとめたわけです。ようやく資料のとりまとめが始まったというぐらいですので、まだまだと言わざるを得ないかと思えます。

菅野 ありがとうございます。宗教情報センターで、研究員の藤山みどり氏が「宗教界の歴史認識」について、レポートを提出されておりました、それを見ると各宗派がどのような反省をしているか、謝罪文を出したかということがわかります。その中で、日蓮宗に関しましては、西川景文宗務総監の「まず謝罪せよ」という昭和二十四年の『宗報』に掲載された一文を紹介されていますが、ただ宗教情報センターの評価としては、これは宗派内、教師に対して行われたものであつて、社会全体に対する謝罪文ではない。したがって、日蓮宗は社会に対しての謝罪文ないしは反省文を発表してはいないという結論を出しております。天台宗もそうですね。その辺で進んでいるのはやはり浄土真宗なのですが、そういうレポートもありません。

それでは、次の質問に移りたいと思います。次は、池上先生に対してです。「戦争を考えるうえでエネルギー問題が外せないと思いますが、日本の自給率の低さに関してはどうに考えられますか。台湾有事の可能性についても、見解をお聞かせいただければありがたいと思います」ということです。軍事的・外交的な問題に関することですから

ども、よろしく願います。

池上 エネルギー問題について、日本のエネルギー自給率は大変低いので、まずは色々な資源、色々なところから様々な供給ルートを持つことは大事です。それからもう一つ、再生エネルギーの問題があります。再生エネルギーでよく太陽光パネル、反対している人、作るときにそれこそCO₂が出るとか、廃棄するときに問題があると言われるかもしれませんが日々情報更新、アップデートしています。今は「ペロブスカイト太陽電池」というものが開発されようとしております。これで、今までの太陽光電池の欠点をカバーできるのではないかと、そういった技術がどんどん発展してきておりますので、自給率を上げていくことはとても大切なことであると思います。

あと核融合、世界が協力して開発している核融合のITER（イーター）計画というのがあって、現在、フランスで建設が進んでいます。日本も参加していますが、これは核融合炉ですから、核爆発の心配がない。また、その資源も海から取れるので安定的。核廃棄物も百年程度で消えてしまう。人類で協力し合って、未来の安全なエネルギー対策というものをやっていこうという動きの一つです。ペロブスカイト太陽電池について、興味がありましたら調べてみてください。それが実用化するといいなと思っております。

また、この台湾有事の可能性について、これは難しい問題で、あるともないとも言いづらいです。日本がどうするかということも、色々あります。武力衝突を避ける方法を模索しなくてはならないと思います。

菅野 続けて、池上先生、講演中にありました「ソフトパワー」という言葉に反応されている方が結構いらっしやいます。「ソフトパワーについて、その中にお題目が入るのか、ということについて、詳しくお話を伺いたい」。それに関連してではないのですが、「ソフトパワーに関して、仏教、お題目が大切だということになると、世界平和に最も

貢献しているのは創価学会ではないか」という質問をいただきました。「例えば、熱心な信者でオーランド・ブルームさんという俳優の方がいて、ゼレンスキー大統領に、池田大作の仏教思想を直接伝えたとニュースになっていましたが、そういう各界の動きというのが、ソフトパワーの一部に当てはまってしまっているのではないかといいことですね。それから、「例えば中国の一路政策なども、ソフトパワーということになるのでしょうか。ただ、中国の場合、それを利用して帝国主義的野望の拡大を目指している部分もあると思うのですが、これはソフトパワーであるのか、また、例えば他国に対しての経済的支援や人道的支援の実際との関係等」とか、少しお聞かせいただければと思います。

池上　そうですね。ソフトパワーというのは、いわゆる軍事力とか経済力のように、どのぐらいのものだと数値化してみることができないものです。でも、やはりそういう力は現にある、しかし、数値化はできない。そこがソフトパワーの弱点かもしれません。ここで、先ほど創価学会のことについておっしゃいましたが、私も宗教的観点からは詳しくお答えすることができませんので、そちらの専門家の方に回していただければと思います。

中国の一路政策については、例えばその政策が、その国にとってありがたいなど、中国経済が入ってきたことによって、その国が凄く豊かになってありがたいと思ってくれていて、何かあったときには中国に協力したいと思う気持ちが起こるならば、そこにはソフトパワーが生まれているといえるのかもしれないです。しかし、一路の政策を受け入れた結果、中国が色々無理難題を言ってきたり、漢民族が沢山入ってきたりとか、嫌だなと思いがらも、それも仕方がないと受け入れているような状況であるのなら、それは「ハードパワー」、経済力の持つハードパワーで押さえ込んでいると、そういうことになるのだと思います。

ですので、日本の政府開発援助（ODA）の政策では、他国で橋を作る支援をするときには、その土地の人たちに

橋を作る技術を教えて、維持する方法も教えています。そういう形式をとることで、日本は経済支援を行う場合にもソフトパワーが生まれるような経済支援をしています。ソフトパワーというのは、相手がどう思ってくれているかというの、数字では測れないわけですが、相手に魅力があるなと思ってもらえることで生まれる力なのだと思います。ただできればと思います。親日家になるとか、日本に行ったらみんなが親切にしてくれた、ああ、いいなど。日本に行けば治安もいいし、みんな親切にしてくれたと、そういうところでソフトパワーが生まれて、親日家が生まれるのではないかなと。そういう形で、ソフトパワーを捉えてくださったらいいのではないかと思います。

菅野 赤堀所長に対して質問です。「一般の人々が戦争の現状を知る上で、それを知る方法はメディアしかありません。しかし、多くの人々は、一個人が国同士の戦いを解決するために、どう動くかと考えることは少ないと思います。人間の情報収集においては視覚情報が八十%を占めますので、メディアで悲惨な戦争の状況を自分の意思にかかわらず無限に取り込むことは、心をむしばんでいくこととなります」、要するに、メディアの問題が非常に大きいということを指摘されています。

実は、同じような質問がもう一つございました。「ロシアによる特別軍事作戦以降でしばしば目にする「認知戦」という『陸海空の戦い』『宇宙サイバー空間』の領域を超えて人々の認知に働きかけるマスメディアから、SNSの世論工作から、知らず知らずのうちに一般大衆が戦争に加担、翼賛しているのではないかと危惧します」。これについて、これは戦前のプロバガンダにも通じるころがあるので、三先生にお答えいただきたいのですが、まず、赤堀所長はいかがですか。

赤堀 戦争は情報戦と戦闘がありますが、二十世紀以降の戦争は総力戦が中心であり、国の産業そのものが戦争の大きな割合を担っています。

総力戦という観点からすれば、国から発信される情報と民間から発信される情報のどの部分がどのような意味を持っているかを判断することが重要となります。

菅野 鵜飼先生、いかがでしょうか。

鵜飼 マスメディアに関してということですね。

菅野 そうです。

鵜飼 私もマスメディアにおりましたので、当然、戦中のメディアの責任、戦争賛美を謳い、人々を洗脳し、それを伝達して国体に結びつけていったわけですから、当然、メディアの責任は重大だと思えますし、影響も重大だと思えます。ただ、実は各寺院、地域のお寺もメディアになっていました。檀家さんや檀家組合といった、いわゆる村人です。村の中心にお寺があり、軍部の意向は宗門が末寺に伝わり、末寺の住職が村の人たち、檀信徒を教化して、戦争賛美に導いていった。そのことを、GHQは分析して、よく分かっていました。結局それが、お寺の村の支配というような形で、結果的には農地解放に結びついていくことなのかなと思います。お寺もメディアであるし、戦時下になるとメディアの役目を果たしてしまうと思います。

菅野 池上先生、いかがでしょうか。

池上 まずここで、常に最近は認知戦とか、そういった情報操作ですね、世論工作、私たちは知らず知らずのうちにこの影響を受けていると思います。そのときにどうしたらいいかというところ、常に情報の発信元はどこなのか、それは本当にそうなのかと、まずは疑いを持って見ることが大事なのではないかと思えます。しかし、これはなかなか難しいですね、私も引つ掛かりそうになったことがあります。ですから、反対の意見も必ず聞かなくてはいけないし、鵜呑みにしてはいけない。常にそのことを自分に言い聞かせて、こういう情報があつたけれど、本当かな、そうじゃない文献を見てみようとか、そうやって情報をすぐに信用しない。それが第一じゃないかなと思っております。

ファクトとフェイクを見極めるのは本当に難しいことです。情報の発信元がどこなのかとか、反対のことはないかとか、情報を鵜呑みにしないで、必ず自分の中で反対のことを考えてみる、反対のことはないかと探してみる、そうやって調べる他ないのかなと思います。

菅野 先ほどの鵜飼先生の話で、戦前はお寺そのものがメディアだったという話ですが、今はもうお寺にそういう影響力はないですよ。

鵜飼 随分村も小さくなって、ある種、お寺の支配力は弱まってきています。ただ、地域や宗派にもよりますが、村社会がお寺を中心になってまとまっている地域は未だにあります。特に北陸地方はその傾向が強いと感じます。北陸の門徒さんの力は、やはり非常に強い、今でも結びつきが強いと思えます。それが一種の平和社会の中で、いわゆるソフトパワーになって、良い影響を及ぼせばいいのですが、ひとたびこれが有事になってくると、それが反面に振ってしまうのではないかなという思いもあります。

菅野 所長、今のご意見についてはどうでしょうか。

赤堀 よく「お寺は、昔は発信源だった」と言われます。これは一つには、江戸時代にお寺が役所的な役割を持っていたことから、人々がお寺に行かなければならないという要素が強かったからだと思います。現代では、学問は大学の諸先生に、知識はSNSに、皆、別のものに取って代わってしまっています。私は、お寺が一般化するのではなく、仏教そのものを発信する場所、仏教がある場所というのが、お寺の最も優れたあり方であり、最終的に評価されると考えています。

それから、マスコミに関係したことで、仏教は間違った考え、誤った考えに左右されない、自ら動かされない自分を作るのが目的で、仏眼・慧眼・法眼という、ものを見る目を培っていくものです。仏教そのものを僧侶が体得していれば、誤ることもなく、また正しいデータを世間に発信していくことができると思います。

菅野 では、次の質問に移りたいと思います。鵜飼先生への質問です。「仏教と政権の結びつきは江戸時代から考えるというのはいかがでしょうか」、近代以降にみられる政権と宗教との関係の萌芽は、江戸時代からあったのではないですかという質問が一つ、それから、「岩倉使節団に同行した真宗僧侶の人たちが欧米で学んだキリスト教ほどのキリスト教だったのでしょうか」という質問です。

鵜飼 仏教と権力との結びつきは、一六三〇年代、江戸時代に寺請制度に始まったという見方で正しいと思います。元々日本の仏教は権力が取り入れたわけですから、ご存じのとおり物部氏と蘇我氏の争いで、結果的に蘇我氏が勝って、四天王寺を作ったというところからスタートします。権力と宗教は常に平行であって、その権力は当然変わ

るわけですが、時に天皇と仏教が非常に密接な関係だった時期もあります。寺請制度は、江戸時代に入って、幕府の権力、中央政治権力と宗教がうまく機能し合って、現在でも、ずっとその影響が続いているということですね。政教分離と言いながら、統一教会の問題もありましたけれど、浄土宗だってそういったある種の政治懇親会、ロビー団体のようなものを持っています。

それから、岩倉使節団に同行した真宗僧侶の学んだキリスト教、これは基本的にはカトリックですね。教会視察とあって、使節団と共に東西本願寺のトップが欧米の教会を視察して回りました。教会と国民との関係性について、日々学んでいたという記録があります。

菅野 続きまして、赤堀所長に対してです。「アインシュタインの示唆するところを受け止めて、ではどのように対応することが私たちに求められるでしょうか」という質問です。

赤堀 実は、私は理系が好きで、それこそ小学校の頃からアインシュタインとか、子供の科学とか、そうした本を読み、仏教を学ぶきっかけも、日本大学の山本洋一先生という方が書かれた、『仏教と自然科学』という本が入口であります。日蓮宗では、亡くなった立正大学の天台学の研究者、日比宣正先生が、仏教と科学に関して、四冊ぐらい連続で本を出されています。私も、できるだけ科学と仏教の相関関係についてまとめてみたいと思いますが、これは科学と宗教の対話、それから共同研究ということが必要なのではないかと思えます。

アインシュタインも、最後に、世界の宗教が一つになるとすれば、東洋の宗教が中心となるであろうと、仏教を暗示する言葉を残されています。そうしたことから、実は仏教は科学と同じ水準で議論できる、あるいはリードしているような思想内容を含んでいると考えます。それこそ蓑輪先生が行われている禅定三昧の研究も、科学的データに

基づいた脳波の研究によって、科学的にも明らかにされてきていると感じております。

これからも、アインシュタインの科学と宗教というのは、私は同じ地平にあると考えています。アインシュタインは平和の中にある科学、科学で理解される宗教というものを求めているということで、単なる科学者としてではなくて、平和論、戦争論の先駆者としての位置付けも、意味あるものではないかと考えております。

菅野 次の質問です。こちらの「戦時国際法（ユスインベロ、ユスアドベルム）について教えてください」、これは池上先生に対する質問です。「ロシア、イスラエルで国際社会の認識がなぜ違うのか。ロシアとイスラエルとで同じように戦争を起こしているけれど、国際社会の認識がなぜ違うのか。イスラエルに対して多少同情的であるとか、ロシアに対して全面的に西側が敵対しているとか、なぜそういう認識が違うのか」ということの理由を教えてください」という質問です。

池上 ご質問された方は、国際法についてよくご存じの方だと思います。ユスインベロとユスアドベルムの違いとか、ロシアによるウクライナ侵攻に正当性があるのか、ロシアのやっていることに正当性があるのかとか、そういった戦争の国際法についてということですが、戦争自体を国際法は禁止しておりません。戦争するなら「正しい戦争」をなささいということなんです。その「正しい戦争」というのが何かというと、一つは、正当な理由があるのか。そういうことなので、みんな戦争に正当な理由をつけているわけです。

それと、宣戦布告をしなくてははいけません。「もし言うこと聞かなかつたら、何月何日から戦争を開始しますよ」というように、宣戦布告を必ずしなくてははいけません。奇襲攻撃はだめ、それは国際法違反です。それから、市民をターゲットにしてはいけません。化学兵器を使ってはいけません。戦争にはこれらのようなルールがあります。それを破れば、

国際法違反ということになります。戦争自体、戦争そのものが国際法違反ではない。戦争するにはちゃんと戦争のルールに従ってやりなさいというのが、国際社会です。

それから、ロシアとイスラエルとで、国際社会の認識が違うのはなぜか、本当にこれはダブルスタンダードです。ロシアにはやってはいけないと言っていることを、イスラエルに対してちよつと言いつらい、ダブルスタンダードになっております。これはどうしてなのかといった場合に、イスラエル側に立てば、先にハマスという強硬派が突然侵入して多数の人を殺し、さらに人質を取ってしまったからだとか、やられたものに対しての報復だという理由。一方でこれだけ多くの何の罪もないパレスチナ人市民が犠牲になっている、これは人道的におかしい。ここところが微妙な駆け引きでして、一概に、これはこうだからとは言えない、それが国際社会だと思います。

でも、人道的な問題というのを、もっと大きく取り上げなくてはいけないのではないかと、今、国際世論の大きな流れになっているのではないかと思います。でも、ダブルスタンダードだと思っただけで見てください。矛盾がいっぱいあります。

菅野 今の先生の発言は大変重いと思っただけで聞いていました。やはり、現実にはそういうふうになることがあるんだなと思います。

続きまして、あと二つ質問がございます。一つ目の質問は、「戦後の各宗の平和運動、色々ありました。新宗教も含めてですが、特に立正平和運動、我々日蓮宗が掲げた平和運動に関して、どのように評価されますか」。これにつきまして、赤堀所長にお聞きしたいと思います。

赤堀 これは、日蓮宗が公的に展開している、唯一の平和に対する運動として、評価され得ると思います。評価とい

っても色々あるとは思いますが、原水爆禁止ということが契機になって、運動が各宗派の中にも盛り上がってきました。その中の一つとして、日蓮宗立正平和運動というのが立ちあがってきました。当初は、どうしても右翼系の戦争に反対する、アメリカの戦争に反対するという点が強く、社会党・共産党色が強い運動だったような気はします。兎に角、そういう人たちの力もあって、立正平和運動が日蓮宗に根付いていったと評価させていただいております。しかしながら、現在に至って、立正平和運動に関わりがある、あるいはそれを知っているという方がどれだけいるかというのが現状です。これは、一つには、「反戦運動は即ち平和運動である」という考えに直結してしまつて、今日私が論じてきたような、なぜ戦争をしてはいけないのか、なぜそれでも戦争するのか、平和のためにどのような方策を考えていかなきゃいけないか、こういうことが、この運動の中であまり伝わってこなかったような気がします。私も、実はそういう点に納得がいかなかったために、この運動には積極的に参加することはありませんでした。ただ、もう一度これを見直して、今の若い人たちにもこうしたことを理解していただくということは、大事なことだと考えております。

菅野 鶴飼先生にも同じ質問についてお聞きしたいと思います。

鶴飼 今、赤堀所長から「若い人に」という発言がありました。私も宗門大学で、いわゆるお寺の子弟に対して教えていますが、戦争と仏教という話についても、かなり時間を取ってやります。仏教者の戦争加担について、こと細かく説明をした後に、仏教学部の学生たちに、「これから日本は台湾有事等、今後君らの世代もしくは君の次の世代に有事がある可能性は非常に高い。そのときに召集令状が来る。君たちは召集令状を蹴って僧籍をはく奪され、市民権を奪われて、投獄される覚悟で戦争に行かないのか、それとも銃を取って戦地に行くのか、目を伏せていいから、ど

ちらか正直に手を上げなさい」というようなことを、毎年だいたい二十人くらいの学生に聞いています。

どういう結果出ると思いますか。私は愕然としました。戦争に絶対は何があっても行かないと答える割合は、一割もいません、一人か二人です。致し方ないから行く、これは正直な答えです。私はこの結果を見て、学生たちに「では、戦時下と同じですね。仏教界では、また同じことが起きますね。」と言います。残念ながら、現実には、そういう状況になっているわけです。

だからこそ、こういった、特に宗門大学での「戦争と仏教の関係性」、理想的なことだけではなく、仏教の負の側面について、必ず教えなければいけない。それは仏教界だけではなくて、公教育でも教えなければいけないと、私は思っています。

菅野 ありがとうございます。実はこの質問中、立正平和運動のところだけをお読みしたのですが、教育と宗教の関わり方についてもご質問されてきました。そこを踏まえて、今お二方のお答えて、この方のご質問には全て答えられているのではないかと思います。

最後の質問です。「宗門では令和四年に、ウクライナ侵攻に対して、令和五年にはイスラエルパレスチナ武力衝突に対して声明文を出しています。この声明文の寄稿に現宗研等の組織が関わっていますでしょうか。どのような手順で宗門としての考えを表明していくのか教えてください」。あともう一つは、「過去の戦争に対する各種の声明、特に公式声明のようなものをご教示ください」、この質問に関しては、先ほど鶴飼先生がお答えいただいたと思います。まだまだ不十分だということでございます。今後の新しい地域紛争・戦争に関する公式声明の表明につきましては、ようやく始まったばかりということでございます。我が宗派においては、何が公式声明なのかという点についても考えなければいけません、人によってはもう既に行っているのではないかと、いう方もいらっしゃるかもしれませ

ん。出す出さない様々な考え方の違いも実際にはあると思います。

それから、わが宗派における声明文を出す手順ですが、この点について現宗研は関わっておりません。

赤堀 声明文は、総長名代で日蓮宗として出されていると思います。ということは一応、内局会議で検討されて、出されているということです。現代宗教研究所の所長は、内局ではないのですが、内局会議には出席できるという形での内局というように位置付けられています。この問題が起きたときに、一日でも早く声明を出すべきであるとの合意がなされ、各宗派の中では、いち早く文章を取りまとめ出すことができました。これをやはり『日蓮宗新聞』あるいは『宗報』等に掲載して、一般の僧侶それから檀信徒の方にも、こうした問題を共有してもらうことができました。います。ただ、これからの対応等に関しては、なかなか難しいものを孕んでいると考えております。

菅野 こうした公式声明は、戦前ですと論達という形で『宗報』によく、全く反対の方向性で語られておりましたが、そういうたぐいのものですね。ちなみに、ロシアのウクライナ侵攻に関しましては、宗会も声明も出しています。これは令和二年の『宗報』の定期宗会議事録に載っております。ただ、イスラエルとパレスチナ、ハマスの武力衝突につきましては、宗会の方では声明を出していません。また来年が終戦八十年となりますので、その時には様々な宗派から、公式声明が出されるやもしれませんので、ご留意いただければと思います。

では、これでパネルディスカッション、質疑応答を終わらせていただきます。皆様から沢山の質問をいただきました。ありがとうございます。三先生におかれましては、真摯にお答えいただき、本当にありがとうございます。今後とも、どうぞよろしく願いたします。